HYOGO 150th Anniversary

平成 30 年、兵庫県は成立 150 周年を迎えます。この節目にあたり、ふるさと兵庫を再認識し、新たな兵庫づくりを考える機会とするため、当該事業を実施します。

「歴史文化財ネットワークさんだ」　作成

神戸・三田から北海道開拓を夢見た

北の大地に理想郷を築いた人々

―赤心社の歩みと開拓者精神―

旧赤心社荻伏出張所事務所
（明治 21 年 6 月築）

北海道浦河郡浦河町役場荻伏支所前に
建つ開拓功労者の３胸像

NPO法人　歴史文化財ネットワークさんだ

【表紙の写真説明】

写真:上　赤心社記念館

赤心社記念館は、旧赤心社荻伏出張所事務所。明治 21 年 6 月 1 日に赤心社が行った農耕・牧畜・樹芸・養蚕・商業など諸事業の事務所として新設。大正 7 年、赤心社事務所は荻伏村に寄付され、公会堂として現在の荻伏支所の位置に移転後、大正 14 年から荻伏村役場庁舎として活用された。さらに、昭和 29 年現在地に移転し、浦河町郷土館として再利用された。そして、昭和 49 年に赤心社記念館と改称して現在に至っている。棟梁は明治 17 年神戸から入植した田中伊輔。

写真:下　開拓功労者3胸像(三聖の胸像)

昭和 10 年 9 月 25 日に建立。

奥(左):澤茂吉像:赤心社現地指導者として開拓の困苦を味わうも、開拓民を慰撫督励し、開拓を軌道に乗せ、学校、病院、郵便局等の整備に尽力するとともに各種公職に就き日高、荻伏発展の基礎を築いた。

中央:西忠義像:会津藩若松鶴ヶ城で出生。明治 34 年日高支庁長として赴任後、日高の開発に尽くす。

手前:鈴木清像:赤心社初代社長。現地の任は澤茂吉に託するも、常に来村して指導し、新知識を拡め不抜の開拓精神で荻伏開拓の基礎を築き上げた。

赤心社を訪れる旅一行

福富悦夫　池田洋介　藤田裕彦　廣山雄一　若林　良　山口武宏

はじめに

三田で明治時代初期の郷土史を学ぶ人達は、必ず“赤心社”という固有名詞に出合います。これまで、赤心社と言えば、“明治初期に神戸で元三田藩士の鈴木清が設立した北海道開拓会社であり、開拓当初は困難を極める中において、鈴木清は「開拓の成功には優れた現地指導者が必要」と考え、その指導者として同郷の元三田藩士である澤茂吉に白羽の矢をあて北海道に送りました。その後、澤茂吉の指導のもとで「赤心社」は多角的な経営、混同農業への転換を図り今日に存続する基礎が築かれ、今なお北海道日高の浦河町に大きな足跡を残し存続し続けています。

鈴木社長、澤茂吉は共にプロテスタントであり、その経営はキリスト教精神に基づいて運営され、開拓の苦難を乗り切ったのは信仰による団結力でありました。現在、浦河町役場荻伏支所前には鈴木清、澤茂吉の胸像が建立されその偉業を讃えています”というのが一般的な伝わり方です。

このような伝わり方の中で、鈴木清、澤茂吉の二人の人物像は出身地の三田では語り尽くされていますが、赤心社が今日まで存続し続けている要因とか、彼らの精神を引き継いできた後の世代の歴史については殆ど伝わっていないのではないであろうか…、そのためには現地に赴いて先人の足跡を辿り、現地の息吹を感じ取ってみる必要があるのではないだろうか…との思いから、私達「歴史文化財ネットワークさんだ」の会員有志 6 名は、昨年 9 月 20 日から 22 日まで北海道浦河町を訪れ、浦河町立郷土博物館の毛内裕之氏、澤茂吉の御令孫で現赤心社代表取締役の沢恒明氏、澤茂吉の後を継いだ向井祐蔵の御令孫で荻伏地区自治会連合会会長の塩出諭氏、赤心社の歴史に精通されている元浦河教会の五味一師にお世話になり、赤心社の足跡を辿るとともにお話を伺ってきました。

この場を借りまして、現地でお世話になった方々にお礼と感謝を申し上げます。

脈々と赤心社の精神を繋いできた人たちの北海道開拓の困難、苦労に立ち入ることは適いませんが、明治初期に開拓を目指し渡道した団体、結社が多い中で、何故に三田出身者が中心になり経営に携わった「赤心社」が存続し続けているのでしょうか。この回答にはなり得ませんが、これらの端緒にでも触れて頂ければ幸いと思い、現地での調査、見聞等をもとに、また訪問前後の三田市立図書館での明治初期の北海道開拓状況、赤心社関連資料の調査、そして、訪問に際し北海道浦河町立郷土博物館から送って頂いた資料等をもとに「小冊子」を作成いたしました。

三田の先人達の偉業を地域の人達に広く知って頂ければと願っています。

平成 30 年 9 月 10 日

ＮＰＯ法人「歴史文化財ネットワークさんだ」

「赤心社を訪れる旅」一行

本冊子の構成と目次

第１章では明治初期の国策としての北海道開拓と赤心社の位置づけを考え、
第２章では赤心社の誕生からの歴史（あゆみ）を振り返り、
第３章では訪問者各自がテーマ別に分担記述し、
第４章ではまとめとして現在まで存続してきた要因を探ってみました。
（なお、文中 既に歴史上の人に対しましては敬称を省略しています。）

―目　次―

第１章　明治時代初期の北海道開拓と赤心社…… 1
第２章　赤心社の歩み―北海道に理想郷を求めて―…… 6
第３章　訪問者レポート
引き継がれる「赤心社」開拓者精神―赤心社が残した足跡―……19
１．故郷・三田から引継がれた精神……福富悦夫……20
２．赤心社とキリスト教……廣山雄一……24
３．赤心社と教育……藤田裕彦……30
―「愛荻舎教育」がもたらしたモノ―「赤心社」とその教育が遺したもの―
４．赤心社と馬牧……池田洋介……39
５．赤心社と医療―竹内雄四郎の渡道……若林良……43
６．赤心社を支えた女性たち……山口武宏……47
第４章　赤心社存続の要因を探る……51

【参考文献】

「風雪と栄光の 120 年」―ピューリタン開拓団赤心社のルーツと業績を辿る―
山下弦橘　著
「浦河百話」、「続浦河百話」　浦河百話編集委員会編
「北海道の歴史」ｐ177 開拓使の設置　ｐ202 士族授産と結社の団体移住　山川出版
「ピューリタン開拓　赤心社の百年」　本田貢著
「北国に光を掲げた人々」―神戸から浦河に来たピューリタン―
荒井良夫　著　北海道科学文化協会刊
「近代化と宗教」川崎喜久子　著　中央公論事業出版
「明治の礎・北海道開拓」サイトマップ
「浦河町史」（上巻、下巻）、「新浦河町史」（上巻、下巻）
「神戸女学院百年史」（総論、各論）　昭和 56 年 3 月 12 日刊
「三田藩士族」　高田義久著
「URAKAWA　100YEARS」　浦河町町制 100 周年記念誌
「愛荻舎の道」竹内一雄　編　（株）だいしょう
「北海道開拓者精神とキリスト教」　白井暢明著　北海道大学出版会

第１章　明治時代初期の北海道開拓と赤心社

１．明治新政府の樹立と北海道開拓

戊辰戦争が終結した後、名実と共に明治新政府が成立することになり、それまで蝦夷地と呼ばれていた地を北海道と改め、明治 2 年（1869）省と同格の中央官庁である北海道開拓使が設置された。

明治 6 年開拓使札幌本庁舎
（北海道開拓の村にて再現）

明治新政府の北海道における対策は一変し、失業した士族の救済対策、ロシアの南下侵攻に備えた対策、そして何より重要なことは欧米列強に対抗するため富国強兵の道を歩むための対策であった。

北海道は石炭、硫黄、木材などの天然資源が豊富であり、先ず新政府として取り組むべきは資源の開発であり、北海道を維新後の国力増強に活用し、士族を授産することを目的として開拓使の設置が必要であった。

維新前の蝦夷地（北海道）の中心は函館であったが、新しい北海道の中心地として札幌に開拓使を移し、札幌の開発、道路、港湾、鉄道の整備、鉱山開発、官営工場の建設等を進め、集団移民と屯田兵による開拓を推進した。

明治初期の北海道開拓での新政府の移民政策は大きく分けると、①明治 2 年頃からの開拓使による組織的な移民②戊辰戦争で敗れ、心ならずも「朝敵」、「賊軍」となった東北諸藩の武士団及び明治 4 年の廃藩置県後の没落士族の救済政策に伴う移民、次に③明治 7 年に決定され、翌８年から移住を開始した屯田兵による移民、そして④明治 10 年以降の開拓結社、会社組織による移民に分類される。

２．明治初期における官主導の移民と日高国浦河への入植

明治 2 年（1869）の開拓使による組織的な移民は、9 月に東京で募集した約 500 人を根室、宗谷、樺太に移住させたことに始まる。

写真：杵臼の開拓者住宅（明治4年）
浦河町町制施行 100 周年記念誌より

浦河には、明治 4 年北海道開拓少典朝山禄十が、北海道移民団募集の命を受けて肥後（熊本）の天草、肥前（長崎）の大村を訪れ移民団の募集を行い、翌明治 5 年 5 月 15 日に大村からの移民 21 戸男女 70 余人が西舎へ入植、5 月 16 日に天草からの移民 20 戸男女 93 人が杵臼へ入植したのが最初である。

この官主導による移民団は、7歳以上の者には支度料として15円。家具類の運搬は無料、航海中は三度の飯、渡道後は15歳以上に一日玄米7合、7歳以上は5合、それ以下は3合の支給、薬代は無料、菜料として一日3銭、酒も支給。これらを3年間継続するとする条件であった。（当時の小学校校長の給料が5円であったという。）

ちなみに、10年後の明治15年（1882）、この浦河に入植する「赤心社」は、官船により渡道することにより渡航費は無料になるがその他は全く自費という条件であった。

3．　明治初期の東北諸藩及び士族の入植

北海道開拓使が北海道を分割して各藩に割当てる分領支配の方針を打ち出したことに対し、戊辰戦争で敗れた東北諸藩は積極的に出願した。その中でよく話題に取り上げられる伊達藩の支藩であった亘理藩の藩主伊達邦成とその家臣団の移住について触れてみたい。

亘理藩は、戊辰戦後にそれまでの2万4千石から58石5斗に削減されて家臣の扶養どころか自身の生活にも困窮をするような有様であり、士族身分を捨てて農民になり土地に残るか、あるいは北海道に移住するかの選択を迫られるようになった。北海道移住を選択した士族達は、新政府の北門防備の要請に応じることで「朝敵」の汚名をそそぎ、士族身分のまま彼らの体面を維持し、新天地での家臣団の再建と維持を図ろうとした。

国指定重要文化財・旧三戸部家住宅

伊達開拓団の開拓農家（文化庁データベース）

こうして明治3年（1870）4月には伊達邦成主従は家臣団とその家族220名が有珠郡に入り開拓を行ったことは現在においても度々ドキュメンタリー等で取り上げられているとおりである。伊達藩の支藩ではこの他、角田の石川邦光らが室蘭郡へ、白石の片倉邦憲らが幌別郡へ、岩出山伊達家の伊達邦直らが厚田郡（のち当別に移転）へそれぞれ支配地を割り当てられ入植した。

また、東北諸藩以外では、徳島藩筆頭家老であった淡路島洲本の稲田邦植主従の静内郡への入植は、吉永小百合主演映画「北の零年」で採り上げられた。稲田藩（徳島の支藩）は徳島藩からの分藩独立志向が強く明治3年4月には徳島藩士の洲本襲撃事件も起き、この事態を収めるために明治政府は稲田家主従を同年10月に静内に入植させた。この事件がきっかけとなり淡路島は徳島県から兵庫県に編入されることになったとも言われている。

この他、明治4年に佐賀藩は釧路へ、明治8年に尾張藩は八雲町へ、会津士族が余市へと多くの藩が移住を行った。

4．屯田兵

屯田兵とは、北海道の警備にあたり、平常は農業を営む傍ら軍事訓練を行い、いざ有事の際は軍隊組織として活動する制度である。

屯田兵村の家族

明治20年代末の厚岸郡太田屯田兵村の一家族

「明治大正期の北海道」より

開拓使次官黒田清隆の建議により明治7年（1874）10月に制定され、翌8年4月に最初の屯田兵198戸が札幌近郊の琴似村に入植した。元々この制度を提唱した考えは、困窮士族を北海道に移住させ、扶持を与え、北海道開拓・北門防備と東北地方の困窮士族の授産対策として出されたものであったが、明治9年に秩禄処分が行われ士族の禄制が廃止されると多くの失業士族が発生し、士族授産が国家的な課題となり、その後対象地域は沖縄県を除く全国規模に拡大した。また、士族授産の問題が概ね片付くと応募条件は「士族」のみならず「平民」へと拡大され、明治37年（1904）に廃止されるまでに最終的には37兵村、屯田兵7337戸約4万人が入植した。

5．　開拓会社、結社等による北海道開拓

北海道で農業を営みながら兵役を勤める屯田兵の任務は大変過酷であり、また個人で入植した人達も含めて定着率は必ずしも高くなく、当時の政府はあるいは開拓使は個人よりも団体の方が定着するであろうと考え、いろいろ特典を与えて団体移住を奨励した。この中で会社組織、宗教団体等が開拓団を形成し入植を開始するのは明治10年以降である。

開拓会社の先駆け「開進社」

開拓会社による北海道開拓の先駆けと言われているのが、明治12年（1879）に和歌山県士族の岩橋徹輔が設立した士族授産を目的とした「開進社」である。第四十四銀行の頭取であった岩橋は岩倉具視ら華族に出資を募り設立した会社であり、北海道全土に38ヶ所10万㌶土地の払下げを受け１５か年で開墾し、株式1株で5町歩配当する計画で道南の乙部、長万部、岩内などで事業を開始したが、開墾できたのは550町歩のみで明治15年岩橋は社長を辞任し、17年に会社も解散した。

開拓会社「赤心社」の誕生

明治13年神戸で元三田藩士の鈴木清を中心に設立された開拓会社が「赤心社」である（その誕生から歩みについては、第2章にて記述）。前項の「開進社」と同様に株式会社組織と

して誕生したが、両社はその資本造成に大きな違いがあった。川崎喜久子氏はその著書「近代化と宗教」（中央公論事業出版）において指摘されているが、巨額の開拓資金調達について①旧藩主依存型、②華族依存型、③同志結合型を挙げられ、「開進社」は岩倉具視を通じて第十五銀行（華族資本）に依頼したが得られず株の公募にも失敗し前述の如く数年で余儀なく解散に至った。

一方、赤心社は開拓資金を他に依存しない③の同志結合型で、毎月少額を積立て、10 年満期で株式を取得できる等零細株主にも配慮した資金調達を始め、小作人（赤心社では「耕工夫」と呼称＝社員）であっても株主になれる制度を導入した。当初は 1 株につき 4 町歩を配当する土地配当会社として出発したが、明治 17 年（1884）以降の経済不況から土地価格の暴落を経て、混同農業へ転換を図り土地配分会社から利益分配会社へと方針変更した。

その後も続く「開拓会社・結社」

赤心社以降、開拓会社・結社として興された会社は「共同社」（渡島国上国町）、明治 14 年には「興産社」（石狩国篠路村）、15 年「晩成社」（十勝国帯広）、「開成社」（石狩国札幌江別）16 年「興農社」（後志国寿都郡）、「協同社」（渡島国江差）、「起業者」（後志国岩内郡）と続いていく。

この中で、松竹映画「新しい風」で映画化された依田勉三率いる「晩成社」は明治 14 年静岡県伊豆郡で結成された。代表発起人となった依田勉三は入植地を探し、釧路、十勝、日高を調査する時に浦河の「赤心社」に立ち寄っていることを自著「北海紀行」に記している。

その時期は第 2 章で記述するように、第一次入植団が困難の末に浦河郡西舎（にしちゃ）に入植したばかりで「…ことし着手したばかりで移住戸数は僅か 6、7 戸に過ぎずして特に見るべきものなし。…近日中に赤心社が社員 70 戸をこの地に移住することにした、と聞いた」と記している。

しかし、明治 16 年、帯広に入った勉三の開拓団は困苦にあえぎ、いろいろと手を尽くすが何れもうまくいかず大正 5 年（1916）に活動は休止する。（会社組織の解散は昭和 7 年）

晩成社が解散に余儀なく追い込まれた要因として、依田ファミリー（勉三の兄弟、従弟と勉三）が経営の中心となったこと、又立地条件が悪かったこと、社員間の協調に欠けていたこと等が挙げられているが、それにつけても「依田勉三」は「十勝開拓の父」と呼ばれたり、映画化されたり、また『開拓者依田勉三』（池田得太郎著、潮出版）が出版されたりされていて、現存する唯一の開拓会社「赤心社」との違いは何であろうか。

赤心社も第 2 章で記述するように、その出発は必ずしも順調であった訳ではなかった。明治 14 年に入植地を求めて、当時の副社長加藤清徳を先遣隊として派遣し、開拓団の受入準備を行うが、入植地選定および渡道に係る航海は必ずしも順調ではなかった。

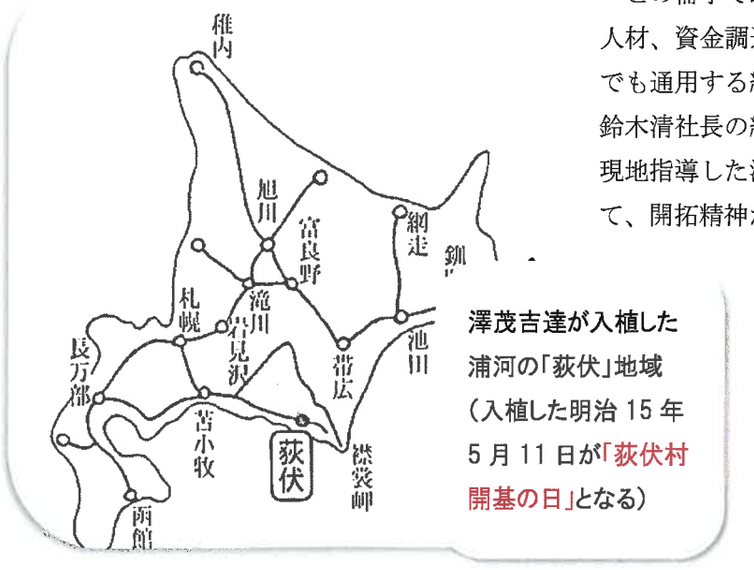
しかし、その状況を悟った鈴木社長は即時に行動を起こし、第二次入植地を日高国浦河の元浦川流域に選定すると共に、困苦な開拓には現地での優れた指導者が必要と考え、知性、人望、行動力を兼ね備えた同郷の澤茂吉を赤心社に迎え入れ、明治 15 年（1882）5 月に第二次開拓団を送った。現在、この二次開拓団が入植した 5 月 11 日が浦河町荻伏村の開基日となっている。

キリスト教集団による北海道開拓

赤心社は株式会社組織による開拓会社であったが、その精神の原点は「キリスト教」に求めることができる。設立に関わった鈴木清、加藤清徳、現地にて入植者とその家族の精神的な支柱となった澤茂吉等の指導者達は神戸、三田等で洗礼を受けたプロテスタント系のキリスト教徒であった。

赤心社に続き、キリスト教集団としては前項で紹介した「晩成社」、明治 24 年（1891）に志方之善を中心とした「神丘」（インマヌエル：今金町）、明治 26 年「聖園農場」（浦臼町）、明治 28 年「小野農場」（美瑛町）、明治 29 年「北光社」（北見市）、「学田農場」（遠軽町）明治 35 年「近藤農場」（佐呂間町）、明治 36 年「誉平教会」（中川町）と続く。

この中で、幕末の志士「坂本龍馬」が北海道開拓を夢見ていたと伝えられていて、その夢を甥っ子「坂本直寛」が実現したといわれている。甥っ子「坂本直寛」の関係した「北光社」は四国土佐の自由民権運動の中から起こり、キリスト教主義農場の理想郷を作ろうと創設された。明治 29 年現地調査等を行い、明治 30 年に社長「坂本直寛」、副社長「沢本楠弥」、農事指導員「前田駒次」で開拓に着手するが、開墾は困難を極め、大正 3 年（1914）僅かの開墾地の大部分を売却し解散した。北光社は経営に携わった坂本直寛等 3 人は一体となって開墾に尽力したが、安易な土地の選定が原因で僅か 20 年で解散に追い込まれたという。



澤茂吉達が入植した浦河の「荻伏」地域（入植した明治 15 年 5 月 11 日が「荻伏村開基の日」となる）

この冊子で取り上げる「赤心社」は土地、人材、資金調達等ヒト、モノ、カネと現在でも通用する経営資源を一早く取り入れた鈴木清社長の経営感覚が後々まで浸透し、現地指導した澤茂吉の人格、見識が相まって、開拓精神が後々世代に浸透していき、この地から幾多の人材を輩出し現在に至っている。

（第 2 章以降で詳細記述）

第２章　赤心社の歩み―北海道に理想郷を求めて―

１．　加藤清徳と鈴木清の出会い

天保 12 年（1841）4 月 28 日岡山県津高郡豊岡村で坂本織居の三男として生まれ、その後加藤政雄の養子となった加藤清徳が岡山で神官修行をしていた明治初期、神戸において邪教であるキリスト教の信者が増え横行しているという噂を聞きつけ、邪教撲滅の意図をもって神戸にやってきたことが赤心社の興った出発点である。

加藤清徳

神戸にやってきた加藤清徳は、キリスト教宣教師達や信者達と討論し、激論を戦わしたが、逆に説得されてキリスト教の信者となった。この時に激論を戦わした一人が元三田藩士である鈴木清であった。（詳細は→第３章　２．赤心社とキリスト教　の項参照）

鈴木清と出会った加藤の気概、情熱の矛先は当時の国策として進められていた北海道開拓へと向い、その夢を鈴木清に相談した。鈴木もかねてから同じ志を抱いていたことから賛同し、明治 13 年（1880）3 月北海道開拓会社設立へ話が進んでいく。

２．　赤心社設立に向けて

加藤は同じ志を抱いていた橋本一狼（兵庫県城崎出身）を誘い、鈴木清と共に 3 人で会社設立の準備として「設立趣意書」の草案に取りかかった。しかし、北海道の実情、移住手続き等の知識もないため、開拓使の御用雑誌「開拓雑誌」を発行していた学農社の津田仙に「設立趣意書」案と「質問状」を送り相談した。（この間の事情は、明治 14 年 4 月 10 日付発行「開拓雑誌」第 6 号に「赤心社の奮発」として津田仙が紹介記事…兵庫県下神戸港の鈴木、加藤、橋本の数名が赤心社という一社を発立し…を掲載している。）

相談を受けた津田仙は、開拓使東京出張所に相談しながら、北海道への渡航手続き、土地の払下げ、開墾に関する疑問等に答え、「設立趣意書」・「同盟規則」・「副規則」案の作成等について指導した。（開拓使については第１章　１．明治新政府の樹立と北海道開拓を参照）

そして明治 13 年 4 月に 3 名連署による「赤心社設立之趣旨」を広告し、株主募集を開始し、6 月に結社出願、8 月 5 日にその許可を得た。この「赤心社設立之趣旨」および「同盟規則」に赤心社を興した 3 人の北海道開拓に対する気構えが如実に現れている。即ち設立の趣意では冒頭から「近時憂国の志士口を開けば輸出入の不均衡を論じ、金貨の濫出を嘆き筆を取れば貧窮士族の無産を説き……吾輩不似と雖も又似て感を同じうする者なり。……今の時に方りて其策略や尠しとせず就中北海道開拓の如きは其最も著明にして最も確実なる者なり。……然れども其事業たる素より遠大の鴻業にして一朝一夕の奏功すべきにあらず随て資本も莫大なれば……吾輩同志相集り無資無産の貧人をして容易に此に従事するを得て小より大に進み、卑きより高きに達し、遂に国家の衰運を挽回するの大事業を興起せんと同盟の人に申合規則を設立する事…」とし、同盟規則では第一条に「本社の趣旨たる無資の貧人をして容易に入社するを得せしめんとするが故に、其の株金を少額と定め、株数も僅少を以て起り随て入社あれば随て大ならしめん事を要す」第二条に「株金は毎月五拾銭づつ積立て満十ヶ年を期とし、総計六拾円に満るを以て一株とす。」そして第十七条には「…社員は…永続の方法を謀り同盟者は子孫永々同心協力して小にしては各自の生産を経営し、大にしては日本帝国の財政を隆豊ならしめ萬一有事の日に際せば北門枢要の衝路に当り屍を北海の海にさらし……嗚呼同志愛国の諸君よ、僅々の一部を投じて永く子孫の生産を図り併せて報国の赤心を奮起するの意なき歟。」と定め、開拓会社を興した気構え、社が零細株主へ特に配慮していること、また、北海道を「北門の鎖鑰」と位置付けた新政府の戦略的な方針を組み込んでいる。なお、赤心社の名は同盟規則の第十七条の「赤心」（邪心のない素直な心）から付けられている。

明治 14 年頃の鈴木清

【津田仙…天保 8 年（1837）7 月 6 日～明治 41 年（1908）4 月 24 日下総国佐倉藩の家老堀田氏の家臣小島義親の三男として生まれる。文久元年（1861）に津田家に養嗣子として入り、藩校・成徳書院で学ぶ。その後藩命で和蘭語、英語や砲術を学び、外国奉行の通訳として幕府に仕える。明治維新後は西洋野菜の栽培などを手がけ、明治 4 年には明治政府が設立した開拓使の嘱託となる。開拓次官の黒田清隆が岩倉使節団に女子留学生を派遣することを提唱すると娘の梅子（帰国後、女子英学塾を創設する。現在の津田塾大学）を随行させた。明治 9 年東京麻布に農産物の栽培、販売、輸入及び農業書籍・雑誌の出版を事業とする「学農社」を設立する。

３．　赤心社の設立（明治 13 年）

設立総会開催

明治 13 年（1880）4 月に開始した株主募集は数十株に達したため、8 月 25 日に神戸で設立総会を開催し社長に鈴木清、副社長に加藤清徳、幹事に湯沢誠明（栃

木県日光市出身)、倉賀野栞(兵庫県姫路市出身)の両氏を選出し、規約で社長は神戸で社業を総括し、副社長は現地に赴いて自ら鍬をふるいつつ、耕夫の使役、開拓事務の総括を行い、幹事は副社長を補佐する、と定めた。(この時点で発起人の一人である橋本一狼の名が無いのは、赤心社設立前に単独で幌別(現在の登別市)に入植したと伝わる。)

赤心社本社が置かれた当時の神戸栄町通

開拓地の選定と受入準備

翌月(9月)に入ると、開拓地選定委員として副社長加藤清を北海道に送り、開拓地の選定及び受入準備にあたった。加藤は先ず札幌の開拓使に出向き、道内の地味の良し悪しや、風土、人情などの実態を聞き、渡島、胆振、石狩等を歩いて適地を探したが思わしい場所がなく、方々探した上で日高国浦河郡に至った。ここで現地の人達の協力を得日高幌別川流域の西舎に入植地を見つけ、北海道開拓使に願い出、10年間で開墾した土地は無償で払下げを受ける「無代価下付」が許可された。

第一回株主総会と移民募集

翌明治14年1月に第一回株主総会を開催し「耕工夫規則の大旨」を決定し、株主の中から委員を選出した。委員は赤心社の下支えの役割を果たす役割を担い、この中には旧三田藩主九鬼隆義や大参事白洲退蔵、元三田藩医木村強、摂津第一基督公会(神戸教会)初代牧師松山高吉の名も見え、含めて14名選出された。

㊟ 前項の「同盟規則」は現在の定款、「耕工夫規則」が就業規則に該当する。

募集した株式は、4月には600株に達したので移民募集に着手した。これに広島県人の22戸35名をはじめ香川、東京、群馬、兵庫県から計28戸53名(先遣の加藤清徳含め)の応募があり第一次入植団が結成された。

4. 第一次開拓団の苦難の航海と入植(明治14年)

第一次開拓団の苦難の渡航

明治14年(1881)5月19日に倉賀野栞幹事をリーダとした第一次入植団を乗せた官船弘明丸は浦河港へ到着したが、神戸港を出港以来航海は苦難の連続であった。函館までは順調な航海であったが、函館で東風が強く20日間近く足止めとなった。赤心社の募集規程では移民の途中滞在費は全て自弁ということであった為20日間程の費用は借金となり、また官船渡航では器械類の催行は出来なかったので別の帆船で運んでいたが、この船が千島の択捉島まで流され、その上に船中で伝染病(腸チフス)に十数名蒙りまさしく苦難の渡航であった。

第一次開拓団の入植

副社長加藤清徳は前年から浦河で一人越冬したが、まだ住居など出来上がっておらず、そのため婦女子などは浦河に滞在させ、男子たちは西舎で小屋づくりから始めねばならなかった。その上別の帆船で送った農機具、生活用品は択捉島まで流され着いたのは、既に播種時期を逸した6月下旬であった。更に函館で足止めされた滞在中の費用は自弁のため入植者たちは最初から借金返済を迫られることとなり、耕夫達は借金を払うための現金収入を得るために昆布漁の出稼ぎに出たこと等から、最初から困難な状況に陥っていた。

鈴木清社長の浦河視察

開拓が殆ど進んでいないらしいとの噂を聞き現地の状況を案じた鈴木清は、6月26日に北海道に向かった。その内容は「北行日記」に詳細に述べられている。

鈴木は加藤清徳の妻子を伴い先ず、神戸港から横浜港に30日に上陸し東京に行き、東京出張所の桂時亮主任(赤心社委員)と社務の打ち合わせ、二日目以降は学農社の津田仙と出会い、また赤心社より早い時期の明治12年に和歌山県士族を中心に開拓会社を興し、既に北海道函館支庁管内に入植していた「開進社」岩橋社長との懇談、浦河に送る日用品の買付等精力的に動き、北海道函館港に7月23日に着いた。函館では赤心社函館取次所を運営する北原藤助や中川嘉兵衛(共に後述)に会い、その後馬車、汽船、騎馬により浦河に7月31日着いた。当時の浦河は戸数100戸程で加藤副社長が単身で越冬した土地で赤心社臨時出張所を設けていた。翌8月1日に入植地に入った。

鈴木社長が開墾地で見たのは、加藤副社長と他2名、成墾地は僅か七反歩、建て掛けの30坪の長屋2棟、馬13頭であり、多くの耕夫達は全く見えなかった。当日、東京で現地訪問を約束していた津田仙が姿を見せ一緒に未墾地を巡回し、伐木の手順、家を建てる場所等の指導を受け翌日津田仙を見送った後、加藤からこれまでの経緯を聞き、今後について三日三晩話し合った。

8月4日から鈴木社長と加藤副社長は、札幌に出向き開拓使(丁)へ依頼・申請(器械類、耕作教師の派遣その他)、耕牛5頭、器械類の購入等を行い、また浦河では出稼ぎ中の耕夫の呼び戻しを行った。

また、日曜日に耕工夫等を一同に集めて議論する集会を持ち、苦情、問題点等を述べる機会を工耕夫に与えたり、自らも鍬を持ち開墾作業しながら徐々に開拓を軌道に乗せていった。そして開拓団のある程度の挽回を見届けた鈴木社長は10月4日に西舎を離れた。

第二次開拓団の入植地選定

帰途、10月5日荻伏村に立ち寄り、元浦川流域を視察し、新たな入植地(開墾地)をここに選定した。この時の鈴木社長の理由とおぼしき記述が「北行日記」に記されているが、その眼力に驚かされる。すなわち、現状分析、将来性、入植者達の教育と期間、天変地異の可能性等に触れ、総合的に考えて元浦川流域を第二に入植地としたことが窺える。

その後、札幌に向かい10月15日まで滞在した。その間に開拓使に出向き機械類の払下

げに等ついて依頼し、函館に向かった。

途中、元伊達藩の開拓した開墾地を見学しながら、21 日函館に到着。そして北原藤助に赤心社の函館取次所の事務を委任し、また先進の「開進社」と共催で演説会を開催しながら 10 月 28 日まで滞在した。

帰途に東京出張所に立ち寄り、株主や委員に現地報告や今後の援助を依頼し、神戸港に帰ったのは 11 月 11 日であり実に 4 ヶ月半の視察の旅であった。

この鈴木社長の北海道浦河の視察訪問が、耕工夫等の開墾作業に勇気を与えたこと、また現地で開拓における課題を見つけ、函館、札幌にて開拓使等を訪問し、対策、対応を行ったことが赤心社の歩みに道筋をつけたのではないだろうか。（この視察も含めて鈴木社長は亡くなるまでに 13 回現地視察を繰り返し、その都度抱えている課題、問題点を克服していった）

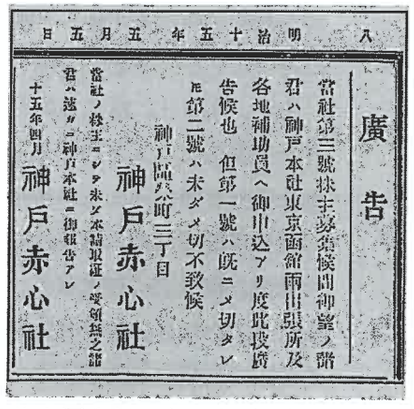
5． 第二次開拓団の募集と入植（明治 15 年～17 年）

開拓管理人の選定

神戸に帰った鈴木清は、第二次の移民募集を開始した。特に、現地視察を終えた鈴木は開拓管理人の必要性を痛感しており、その資質として①誠実に最善の道を選択できる知性②人望③行動力の 3 点に秀でた人材が必要であると探し求めた。そして、あらゆる人脈を辿った末、元三田藩士であった澤茂吉に辿りついた。

第二次開拓団の指導者　澤茂吉

澤茂吉は、嘉永 6 年（1853）三田藩澤甚左衛門の長男として生まれたが、13 歳の時父の病死により家督を相続した。その後、藩校造士館で学び、明治 3 年 17 歳の時に上京し、慶應義塾に入り福沢諭吉の門下生となったが、入学して 2 年目の頃、母一人、子一人離れて暮らすことに耐えられなくなった母、犀（子）から帰郷を促す便りが届き、学業を中断し故郷へ帰った。20 歳の時、彼は将来のことを考え奈良県の牧牛場で育牛や練乳法を学び、神戸の元三田藩主九鬼家の牧場で牧牛の飼育を行い、更に同志を募り茶園経営、また組合組織による製乳業を行っていた。



廣告

當社第三號株主募集候間御望ノ階君ハ神戸本社東京函館兩出張所及各地補助員ヘ御申込アリ度此段廣告候也　但第一號ハ既ニメ切タレ　第二號ハ未ダメ切不致候

神戸區八間町三丁目

神戸赤心社

當社ノ株主ニシテ未ダ本證書受領無之諸君ハ速ヤカニ神戸本社ニ御報告アレ

十五年四月

神戸赤心社

明治十五年五月五日

明治 8 年（1875）7 月郷里三田に摂津第三基督公会（三田教会）が設立された際にいち早く洗礼を受け、明治 12 年には片山源次郎二女の貞（のち天以と改名）と結婚した。

また、明治 10 年から 12 年まで神戸ホーム（現在の神戸女学院の発祥）で教師として漢文、数学、習字を教えたとも伝わる。（神戸女学院史）

そして明治 15 年（1882）4 月 1 日鈴木社長の誘いを受け赤心社に入社した。

第二次開拓団の入植

澤茂吉を団長に和久山磐尾（元三田藩士）を書記として第二次開拓団は、明治 15 年（1882）4 月 15 日神戸港を出港し 5 月 10 日に浦河港に到着した。一行の神戸出港に際し、宣教師ギューリックはオルガン一台を贈っている。（第 3 章　6 赤心社を支えた女性たち　）

開拓者が移住当初立てた「開拓小屋」草葺きで建てられた小屋が多かった。写真は「北海道開拓の村」に再現された小屋（札幌市）

この時、入植した人達は、愛媛県 13 戸 35 名を始め広島県、兵庫県等合計 42 戸 83 名であり、三田関係者は澤茂吉家族（妻天以、長男亮、母犀）、和久山磐尾家族（妻行子、二人の子供）、向井祐蔵（19 歳）・鉦太郎（22 歳）兄弟であった。

到着した翌日、鈴木社長が視察時に決めていた元浦川筋の荻伏の原野に入った。この 5 月 11 日が荻伏村の開基の日となっている。（前年入植した西舎地区を第一部として加藤副社長が管理し、荻伏地区を第二部として澤茂吉が管理することになった。）

澤は明治 15 年の暮れには赤心社開拓事務長になり、翌年の 3 月の株主総会では加藤清徳に代わり副社長に就く。

明治 15 年（入植直後の取組み）

荻伏地区に入った開拓団は、取りあえず掘っ立て小屋を作り、開拓に励んだ。この年 2 月開拓使が廃止され、北海道は 3 県（函館、札幌、根室）時代に入っており、日高地方は札幌県の管轄となり業務はそのまま札幌県に引継がれた。札幌から農業教師を招いて農機（米国から買ったソルキープラウ）の正確な操作を学び、耕牛と農具の払い下げを受けたこと等により、この年の開墾は新墾地 24 町歩、作付地 22 町歩に達した。8 月には西郷従道（農商務卿）が視察に訪れた。

また、同月には鈴木社長が 2 回目の視察に訪れ、澤をはじめとする入植者達と相談し、耕工夫を開墾と雑役を主とする若者、独身者達を中心とする「墾成組」と耕作に専念することを主とする家族持ちを中心とする「墾成地割渡人」の二つに分けた。これにより以降の開拓事業は効率的に進むようになった。

澤茂吉は入植すると住居となる掘っ立て小屋を作ると同時に 2 間半に 5 間の草葺きの集会所を設け、日曜日は安息日として仕事を休み、農事や日常の悩みを語り合ったり、道徳と

キリスト教の講話を聞いたり、また師である福沢諭吉の精神を語りながら開拓者達の連帯を図った。この集会所は、日曜日以外は子弟の教育の場としても利用された。

なお、10月に澤茂吉は「使命」宣言を発している。すなわち

① 未開の土地を拓きて産を殖すること

② 宗教の自由を重んずること

③ 品性を修養し、人格と陶冶し、一旦緩急あらば北門の鎖鑰たらんことを期すること

の三点である。

明治16年（凶作とバッタ等の被害にあう）

翌明治16年に入ると6月には品川農商務大輔が巡視に訪れ、慰労金を貰って励まされたが、7月に入ると旱魃にあいアブラ虫被害、8月にはバッタの大群に襲われ、10月には大豆、小豆が大雨に流され不運に遭ったが、この年耕地は104町歩に拡大し、収穫高は2千円と計画以上の成績を上げた。

しかし、バッタの被害で常食のあわ、ひえ、トウモロコシ等が獲れなかったため、飢えに苦しんだ。

明治17年（未曾有の大恐慌に巻き込まれる→7・経営方針の変更へ）

この年は日本経済にとり大恐慌に陥った年であり、その原因は秩禄処分の公債発行や西南戦争の戦費を賄うための不換紙幣の乱発等を要因としたインフレが進み、貨幣価値が暴落したことにある。政府は不換紙幣整理に乗り出した結果、デフレを惹起し本州では農作物や地価が大暴落し地租が払えず所有地を手放す農民が多数出た。

このような状況下で、赤心社の株主の中にも、何も北海道の土地を求めなくても本州内で求めればよいということで株を手放す人達が多く株数は三分の一、資金は半分以下に減少した。

9月に現地視察を行った鈴木社長は、澤副社長と話し合い、これまでの土地配分会社（一期十年として、一株について耕地4町歩を分配する）から守成法経営（新墾に力を注ぐのを止め既墾地の耕作を行い、利益を創出し株主に分配する）へと転換を図ることにした。鈴木社長は12月に今後の見通しを付けて神戸へ帰った。

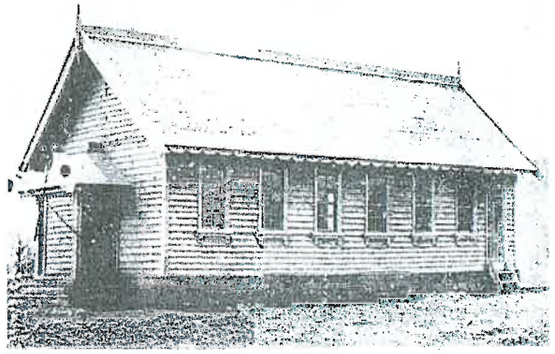
なお、この年は1月に耕牛馬の放牧場として出願していた野深村ケパポロに30万坪拝借の許可が4月に下り、これが後の赤心社の牧畜業の拠りどころとなった。

また、この年の重要な出来事として「赤心学校兼会堂」の設立がある。入植直後に草葺の集会所を建て、日曜日には農作業を休んでこの小屋に集まり、農事、道徳等を語り合っていたが日曜日以外は子供に対して寺小屋式の教育を行っていた。このため開拓団員の中から学校と講堂（会堂）建設の声が上がり設立に向かって動いた。

なお、明治16年には広島県から5戸11人と兵庫県1戸2名そして神戸から田中助（後に元浦河教会の初代牧師となる）の7戸14名、明治17年には兵庫県9戸9名、広島県6

戸8名等18戸21名が入植し、明治末期まで入植者続いていった。（明治18年以降の各年の入植者は平均して2～3戸程度であり、三田関係者は明治19年の森田久蔵夫妻、明治23年の片山敬吉、明治29年の竹内雄四郎（後述）の3戸であった。）

6．「（赤心）学校兼会堂」の建設（明治17年）

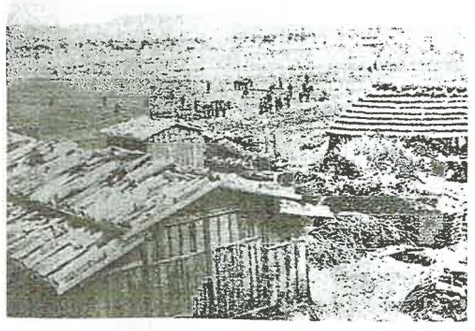


浦河には明治10年に公立の浦河尋常高等小学校が設けられていたが、荻伏からの通学はけもの道しかなく無理であった。そこで前項のとおり開拓団の中から声があがり17年2月に「米国ノ始祖ピューリタンニ倣ヒ、同志ノ義金ヲ以テ学校兼会堂ヲ新築セントス」（学校兼会堂新築之趣旨）を興し寄付を募った。この発起人は澤茂吉と共に入植した元三田藩士和久山磐尾他1名がなっている。この呼びかけに応じ本社、本州の有志、赤心社の入植者、浦河村民等から三百四十余円が集まり、暮れに完成した。学校は官庁の許可を受けて官許「赤心学校」と名付けられ、会堂は元旦に献堂式を挙行した。

この「赤心学校」は明治24年に公立浦河尋常高等小学校荻伏分教場に引き継がれ、その後荻伏尋常高等小学校となり赤心社の開拓精神が引き継がれていく。（→詳細は第3章　3．「愛荻舎教育」がもたらしたモノ―「赤心社」とその教育が遺したもの―）

また、「会堂」は明治19年元浦川基督公会（浦河教会）となり現在の日本キリスト教団元浦河教会へと続いていく。（→詳細は第3章　2．赤心社とキリスト教　）

7．赤心社の経営方針の変更（明治18年～19年）



明治18年頃の荻伏開墾風景（浦河町　町制100周年記念誌より）

県からの報奨金支給

明治18年3月、赤心社は入植後僅か3年間で120町歩余りを開拓し目ざましい成績を挙げたことを嘗され、札幌県令調所広丈から未だ仮小屋に住む43戸入植者の小屋代、作料として金八百六十円を報奨金として支給された。

報奨金は赤心社の社員の励みになり、半分を入植者41戸に配り、半分は会社の資金とした。しかし、17戸は報奨金を入植者の教育にあてようと「徳育会」

を設立した。徳育会への各人の拠出金は10円としていたが、明治20年同志社の新島襄は60円の特志寄贈している。(発起人は20名であったが、うち17名がキリスト教徒であり、これが後にキリスト教徒を中心とした村づくりが進められた一つの要因と考えられる。)

経営方針の変更

明治17年の日本の経済不況から赤心社の経営を土地配分会社から守成法(土地会社)に方針変更を鈴木社長と澤副社長は行うべく協議し、明治18年4月の株主総会で決定した。

また、8月に鈴木社長は荻伏に出向き、澤副社長と相談、今後の赤心社の対策として「混同農業」(牧畜業、養蚕業、園芸業等)を実施していく方針を定めた。

混同農業と商店部の開設(明治19年)

明治23年頃の「商店部」

明治19年4月の神戸で開かれた株主総会で、入植以来の赤心社の取組経過を詳しく述べた澤副社長は混同農業を展開していくことと土地配分から利益配分を目標とすることを再確認した。

また、この年西舎と荻伏に「商店部」を開設した。従来から浦河地方は交通の便が悪く、商品の値段の上がり下がりが激しかった。そのため開拓民の生活が不安定になりがちであった。この商店部の開設は、地域全体の物価の安定につながり、赤心社開拓民のみならず住民全体の生活の安定に貢献した。

この年の経営方針の転換等が、赤心社の今後の事業の展開に大きな流れをもたらした。すなわち、鈴木社長、澤副社長の社会変化に対応する柔軟性がその後の赤心社の社業展開に大きく寄与していったと考えられる。

なお、この年5月赤心社設立発起人であった加藤清徳が退社をした。明治14年鈴木社長の最初の視察時に、一緒に開拓を軌道に乗せるため奔走したが、この時に馬から落ちて腰を痛め、その後は副社長の職を辞し雑役係として社務を行っていたが、この怪我が原因であったと思われる。(鈴木社長の北行日記に落馬した旨の記述あり。)

8. 牧畜業にも進出した赤心社(明治20年～22年)

「赤心社」の牧場風景

入植前に奈良県の牧場で育牛・練乳、九鬼家牧場での牧牛経験がある澤副社長は、浦河の地が馬産に適していると、明治17年に野深村ケポパロに30万坪の牧場と牛数頭を借用し、耕馬と牧養に務めてきた。そして明治20年洋種の種馬2頭を道庁から貸与を受けた。丁度この時期に産馬改良組合から種馬の管理を任され、

優良な馬を買い入れて増殖と改良に務めてきた。このような赤心社の取組は付近の住民にも馬産を奨励し、種付け料を無料に、また良質の牝馬を安く買えるようにしたので馬産への意欲は日高全体に広まっていった。

明治21年には牧馬220余頭、牧牛41頭、豚24頭に増えている。そして明治22年には野深の隣接する地に10万坪の貸与を受け、牧畜による赤心社の基礎は固まっていった。

(→詳細は　第3章　4．赤心社と馬牧　)

9. 澤茂吉・地域の指導者へ(明治24年～)

澤茂吉は荻伏村の村風に大きな影響を与えた。その座右の銘は「われ四方より患難を受くれども窮せず、詮ん方尽くれども希望は失わず」とし、円満、謙虚、几帳面で清貧を生涯貫き、荻伏村建設の精神的な支柱となった。(川崎喜久子著「近代化と宗教」)

明治24年には荻伏、野深、姉茶、後辺戸の四か村の総代人に推され、学校、病院、郵便局など住民に必要な施設を整え、道路、河川の治水工事、橋の敷設等の公共事業に奔走したりしながら住民の指導者となっていった。

その役職は日高教育会副会長、北海道農会出席代表者、日高産牛馬組合聯合会役員、日高実業協会副会長、郡農会副会長、漁業組合評議員そして北海道道議会議員など公職は50に達したと言われ、当時の日高支庁長西忠義を助け、日高地方の発展に大きく貢献した。

西支庁長は、何かにつけ澤茂吉を日高支庁の支庁長室に呼んで相談していたと伝わっている。

10. 荻伏村村医・竹内雄四郎の渡道(明治29年)

竹内雄四郎は明治8年19歳の時元三田藩医の竹内玄林の養嗣子となり、明治17年28歳の時玄林の長女小章(こゆき)と結婚する。神戸病院付属医学所で宣教医ベリーの元で医学を学び、学業を終えたのち、大阪の浪速病院等に勤務していたが、恩師ベリーが岡山病院、京都同志社病院に迎えられると恩師ベリーに随伴して医員として勤務していた。

その当時、赤心社の澤茂吉から身近な人で荻伏村の村医をしてくれる適任者を紹介してほしいとの依頼を受け、医員仲間を通じて手を尽くして探したが決まらなかった。

明治29年、交替医師が決まらず無医村になることを危惧した雄四郎は、自ら2年1期の任期で単身赴任した。

しかし、任期が来ても適任者が見つからず、2年後には京都から妻小章、次男昭雄(昭和17年ボルネオ派遣中輸送船撃沈で死亡)、三男鼎(後述)を呼び寄せ、生涯荻伏村の住民医療に尽くした。

(詳細は→第3章　5．赤心社と医療―竹内雄四郎の渡道―　)

１１．澤茂吉の死（明治 42 年）

明治 40 年 8 月第 3 期北海道議会議員として日高・浦河支庁管内から選出されたが、翌 41 年頃より額にしこりができ、次第に激しい痛みに襲われるようになり、竹内雄四郎医師の治療を受けていたが、当時の医療技術ではどうすることも出来ない難病であった。

副社長の業務は、澤茂吉と共に明治 15 年入植した向井祐蔵が代理で務めた。向井は入植当時 19 歳であったが、すでに 45 歳に達していた。

澤茂吉の病状は思わしくなく、竹内医師の勧めで上京して治療を受けることを決心し荻伏を後にした。函館で船を乗り継ぎ東京・築地の林外科病院に入院し、その後慶応病院に移ったがどうすることも出来ず、明治 42 年（1909）9 月 15 日に 57 歳の生涯を終えた。

29 歳で神戸港を出港してから 28 年間赤心社の社業に邁進し、赤心社の基盤は澤茂吉の存在なしにはできなかった。物質的報酬は何も求めず、俸給も極めて低額で澤家の生活は苦しかったと伝わる。

後に向井祐蔵が「理想郷」新聞（後述→第 3 章　赤心社とキリスト教）に「澤茂吉氏を思ふ」との回顧談を寄せているが「誰でも澤氏と話してゐると、慈母の懐に抱かれたやうな氣持、大船に乗った様な心安さを覚へるのが常であった。非常に圓満で謙遜な方で少しも高ぶる様な所がなく、自分の地位を忘れて相談する者と共に泣き共に喜んで下さったので、誰も彼も腹を打明けて相談をかけ、氏を迷惑させたと思ふ。」と記されている。

また「氏の精神は今後益々吾々村民否人類の中に働きて多くの者に感激を與へ、世を聖化向上せしむると思ふ。我々はその徳を敬仰讃美せねばならぬと思ふのである」と…。

澤家の生活は苦しかったが七男四女の子宝に恵まれ、子供たちには東京、神戸、札幌で教育を受けさせた。これらの子供たちの中から後に荻伏に愛荻舎教育を興した三男吉夫、海軍大佐となった四男勇夫、小学校教員を経て赤心社代表取締役となった五男幸夫、理学博士室蘭工業大学教授となった七男茂夫が育った。（長男、次男、六男は早世）

１２．赤心社開拓精神を引き継いだ向井祐蔵（明治 42 年～）

澤茂吉の後継者・向井祐蔵

澤茂吉が病床に伏した時、その社業を代行したのが明治 15 年に澤茂吉に随伴し、僅か 19 歳で入植した向井祐蔵であった。向井祐蔵は元治元年（1864）150 石取三田藩士向井央の四男として生まれた。小学校卒業後神戸に出て鈴木清の経営する缶詰製造会社で働いていたが、明治 15 年 5 月兄鉦太郎と共に赤心社に入社し、澤茂吉に随伴して荻伏に入った。

祐蔵は明治 20 年 1 月 2 日に元浦河教会にて洗礼を受け、明治

24 年に西姉茶の赤心社牧牛場主任、明治 38 年には赤心社荻伏出張所會計主任となる。

そして明治 41 年茂吉が病に伏してから澤副社長の代行として任にあたり、澤副社長が没してから副社長心得として荻伏出張所支配人、現地の総指揮官となり赤心社の社業に励んでいった。実に 19 歳で入植した若者は、45 歳の壮年に達していた。

明治 43 年、赤心社は「共同輯睦の民風良好」の「模範村」として内務大臣表彰をうけ、賞金 500 円を授与された。

また、同じく明治 43 年は荻伏村が独立自治体となっが、向井祐蔵は第一回村会議員に選ばれて、のち 25 年間その任にあった。その間、野深小学校の設立に深く関与し、また農会長、土功・畜産・衛生などの組合長、酪農組合組合長などを歴任し、明治 44 年からは赤心社現業地総轄支配人、大正 9 年赤心社取締役となり、昭和 5 年澤吉夫が荻伏尋常高等小学校校長を辞して赤心社支配人となるまで現地での指導責任者として陣頭指揮をとった。

その後、健康が優れず休養に務めることになっても重要な事は必ず意見を求められ、赤心社と自治体の間に立って公平に両者を調整し、円満に発展させる道を示し住民の絶大な信頼を得た。

昭和 18 年茂吉の後継者としても責任を全うし、80 年の生涯を終えた。

赤心社初代社長・鈴木清の死（大正 4 年 3 月 21 日）

社長は本社（神戸）で社業を統括し、副社長は現地で耕工夫と共に鍬を手に持ち実作業を行いながら指導することが赤心社の決まりであったが、鈴木社長は何か課題があれば必ず現地荻伏へ出向き、澤副社長と共に解決策を探った。実に生存中 13 回も現地を訪れ、その都度現地滞在は 2～3 か月に及ぶことは常であり、開拓団員は強く励ましを受けたことであろう。その柔軟な経営は赤心社の基礎を固めた偉大な経営者であった。

鈴木清についても「理想郷」新聞に向井祐蔵が「幼児より賢く、同輩を抜いてゐたが、長じて藩の造士館に文武の道を学び、特に馬術に長じておられた。維新の頃既に泰西の新思想に触れる事の必要を知り川本清治郎氏に就いて英学を修め、後神戸に到りて商業に就かれた。……氏は実に意志のの強い人で何でもやりかけた事はやりとげずばおかぬと云う人であった。自(おの)が所信をあくまで貫かんとする氏にして始めて困難なる開拓事業がなされし事を思ひ感激にたへざる者があるのである。」と回顧談を寄せている。

直接、現地に在住してはいないが、現在浦河町役場荻伏支所前に「開発三聖の胸像」として澤茂吉、西忠義と共に鈴木清の胸像が建立されているのはその表れであろう。

鈴木清亡が亡くなる直前、大正 3 年（1914）後任社長に森田金蔵を選出した。

森田金蔵は神戸基督教會の役員を務め、神戸 YMCA 理事長、帝国鉄工社長、神戸商工会議所副会頭、衆議院議員を歴任した人であり、昭和 15 年 1 月 18 日に永眠するまでその任にあった。

１３．現在に引き継がれる開拓者精神（昭和 15 年～）

社長制を廃し、本社と事業所（荻伏）に代表取締役を設置

森田社長が永眠した後、昭和 15 年 4 月赤心社は社長制を廃止し、神戸本社と事業所（荻伏）に代表取締役を置くことにして、神戸本社代表取締役に藤村和夫、事業所代表取締役に澤吉夫を選出した。

澤吉夫代表取締役

澤吉夫は昭和 5 年荻伏尋常高等小学校で提唱し、実践した愛荻舎教育を後任校長に就任した竹内鼎に託して退職し、赤心社支配人となった。吉夫は父茂吉の遺志を引き継ぎ理想郷の建設に取り組み、愛荻舎教育で培った育牛、牛乳管理法から日高地方に酪農組合を設立した。愛荻舎教育が日高酪農の発祥と言われるが、その礎を築いたのが澤吉夫であったと言っても過言でない。

昭和 15 年、吉夫は代表取締役を就任するにあたり、「赤心社は過去、新郷土建設の中核体として開拓会社の使命をすでに終えている。」として、小作地の解放をあげたと伝わる。

戦後農地解放と赤心社経営

昭和 20 年（1945）9 月 15 日終戦後の会社経営について協議し、「小作地を自発的積極的に開放して、これによって得る資金は食品加工の拡充と林産、畜産業の拡充に充当する。」と決めた。また、農場関係では酪農経営に転換する方針に決めた。

昭和 22 年、自作農創設措置法の施行により、それまで土地に依存してきた赤心社にとっては、社業の根本を揺るがす重大な危機であったが、山林、牧場、宅地などは残ったので、林産、畜産業、食品加工などへ転換することによって活路を見出だすことができ、この時点で大地主としての赤心社の役割は終わった。

昭和 21 年には食品工場、22 年には穀粉加工業、23 年精穀、精麦業、24 年大豆搾油工場等展開していくが、昭和 25 年澤吉夫社長永眠（享年 57 歳）、26 年 9 月 26 日澤幸夫代表取締役就任、29 年幸夫代表取締役、洞爺丸事故で死去、10 月 1 日塩出宇吉代表取締役就任（塩出宇吉は向井祐蔵の三男で母方の姓を継ぐ）、等赤心社の事業とその経営は展開していき、現在に繋がっていく。

『訪問者レポート』

第３章　引き継がれる「赤心社」開拓精神
―赤心社が残した足跡―

第３章の「はじめに」

明治初期に国策として北海道開拓が進められましたが、現在に生きる私達にとっては、「北の大地に夢を託した人達の話」という受け止め方が多いのではないでしょうか。しかし、夢を抱き北海道開拓に渡った団体、組織は悉く夢破れ、解散、離散したこともよく知られています。

私達の住む「三田」においても北海道開拓に夢を持ち、理想郷を求めて渡った人たちがいました。そして、「三田」から渡った人たちの開拓組織が今なお北海道の大地で活動を続けていることが私達「三田」で郷土史に興味を抱く者にとって「関心」の一つでした。

このようなことから、私達「歴史文化財ネットワークさんだ」の会員有志 6 名は昨年 9 月に現地を訪れ、実際に先人達が開墾の鍬を鋤いた土地に立ち、先人の想いに触れてきました。

訪問に先立ち、浦河町立郷土博物館にコンタクトをとったところ「浦河町の人達の中で赤心社の故郷・兵庫県の三田を知らない町民は殆どいないくらいである。赤心社の足跡は数多いので来訪される前に知りたい事項を整理して来られれば、より有意義な旅になるのではないでしょうか。」とのことで「浦河町史」（新、旧）、「浦河百話」等段ボール一杯分の資料を送って頂きました。

私達は、送って頂いた資料及び三田市立図書館に保管されている赤心社関連冊子等を調べ、かつ浦河町立郷土博物館と連絡しながら訪問先、知りたい事項を整理して 9 月 20 日から 22 日までの 2 泊 3 日の訪問の旅を終えることが出来ました。

訪問が終わってから、旅の一行 6 人は三田市のみならず内外の赤心社に関心のある人たちに報告をしようと訪問記を書くことにしました。単なる赤心社の歴史を報告するのみではなく、切り口を横断的にして書いてみよう…と書いたのがこの第３章です。

第１章では北海道開拓の中での赤心社の位置づけを明確にし

第２章では赤心社の歴史、歩みを振り返り、

第３章では各訪問者の関心事項を各自の感想等を踏まえて記述しました。したがって各節で重複して記載している部分もありますが、各自の「訪問記」として読んでいただければと思います。

1. 故郷・三田から引継がれた精神

福富悦夫

この訪問に於いて、「…の原点は三田にある…」、「三田から引継いだ……」と言う言葉をよく聞きました。それは幕末から明治維新期の三田の風土と関係あるのではないかと思います。

この項では脈々と引継がれた赤心社の精神の原点について探りたいと思います。

三田藩の藩政改革と教育熱

三田藩13代最後の藩主・九鬼隆義は丹波国綾部藩主九鬼隆都の三男として生まれ、安政6年(1869)に養子として三田藩に迎えられました。しかし、この当時の三田藩の財政は逼迫しており、文久年(1862)自ら藩政改革を宣言し、当時藩校造士館教授であった白洲退蔵を抜擢し藩政に参与させました。

三田藩では藩政改革として①財政再建を進めるとともに②兵制改革を行い、慶應2年に他藩に先駆けて槍刀を廃し銃のみの洋式装備の兵式に変更しました。次に③百姓町人が新たな社会状況の中で、生業を全うするためには、知識を得ることが必要であることを強調し、慶應2年、先ず町人の子弟が通う「市学校」が設立され、翌3年には、百姓の子弟が通う「郷学校」が設立され、その後明治初年にかけて藩内諸村に拡大していきました。

元三田藩の士族で後に日本最初のキリスト教新聞「七一雑報」の初代編集長となった村上俊吉(小田原藩医福地貸庵の三男として生まれ、15歳の時三田藩江戸詰医師村上恒庵の養子となる)は回想録「回顧」で、「市学校」、「郷学校」に触れ「…各郷とも、各所にニ三ケ村組合の学校を設置し村内の子弟を此校に集めて、教育することが始められ…實にこの企圖は尋で起るべき小學校の萌芽であったのである。」と回想しています。このように、三田藩は早くから藩士のみならず、町人、農民の子弟に対する教育を制度として取入れました。

鈴木清、澤茂吉は共に藩士の子弟の教育機関である藩校「造士館」で学び、明治期に入ると、三田出身の蘭学者、川本幸民が幕府の開成所教授を辞し嗣子清治郎とともに三田に帰って来て、「英蘭塾」を開塾した折に入塾し、英語、オランダ語、西洋理化学を学びました。

神戸ホーム落成校舎

その後、鈴木清は更なる英語教育を求め、開港間もない神戸に出て、その中で宣教師達との出会いからキリスト教を受容するようになりました。

また、明治8年神戸女学院の母体となった「神戸ホーム」の設立に際しては用地の取得名義人になる等多大の貢献を行っています。神戸女学院百年史によれば、創設者であるタルカット、ダッドレー女史(宣教師)が「三田での伝道活動の後、神戸に帰ろうとする時、三田の母親たちは、その子女を女史とともに神戸におもむかせ、神戸の学校において勉学することができるよう、強く要望している事実」が学校設立への動きになったと

記されており、学校設立の準備段階で「もっとも励ましとなる事実の一つ」として、旧三田藩主の九鬼隆義、旧家臣の鈴木清等の日本人自身が800ドルを学校建設のために献金したことをあげています。

このような三田の教育熱が、北海道浦河の荻伏の地に引継がれ、入植後間もない時期に設立された「赤心学校」に繋がり、当章の3で記す「愛荻舎教育」へと引き継がれていったのではないでしょうか。

福沢諭吉の指南と影響

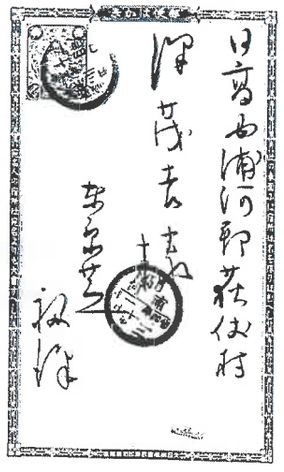
川本幸民は江戸遊学時に緒方洪庵と同門になり、二人は終生の友情で結ばれたと伝わりますが、この縁から当時の三田藩主・九鬼隆義は緒方洪庵の門下生であった福沢諭吉と懇意となり、福沢諭吉は明治初期の三田藩の指南役的な役割を果たしたと伝わります。

明治2年の版籍奉還から4年の廃藩置県をへて6年頃まで福沢諭吉が九鬼隆義に宛てた書簡が17通残されており(慶應義塾図書館所蔵)2人の親密ぶりを伺い知ることができます。

明治3年1月22日の書簡では「一身之独立一家に及ひ、一家之独立一国に及ひ、初て我日本も独立之勢を成」と述べ、政府で人民を統治するものを教育するのではなく、政府を活用しうる自立した民間人を養成することの重要性を説いています。

また、明治5年4月、福沢諭吉が三田を訪れた際に九鬼隆義が廃藩後の処世術について諭吉に質したところ商業への転身を勧められたので、この資本主義的近代精神を容れ、これが三田藩の興望となって明治5年には士族の大多数は開港された神戸へ進出したと言われています。

これらの福沢諭吉の「官より民」という考え等により、商業への転身等が三田の維新期の指針となったと考えることができます。



福沢諭吉から澤茂吉宛はがき
福沢は生涯にわたって澤茂吉を指導したという

鈴木清は、明治6年九鬼隆義をはじめ旧藩主主従が設立した神戸最初の輸入商社「志摩三商会」に従事すると共に、明治7年摂津地域で最初の「摂津第一基督公会」(神戸教会)の設立に奔走し、明治11年当時海外から諸種の缶詰類が巨額に輸入されたため、日本の正貨が海外に流出するのではないかと憂い自ら「牛肉缶詰製造会社」を設立しています。赤心社を興した時の「設立の趣意書」の冒頭で「近時憂国の志士口を開けば輸出入の不平均を論じ金貨の濫出を嘆き……」としているのは鈴木清の心情の一端から出たのではないでしょうか。

一方、澤茂吉は、福沢諭吉から直接指導を受け、「福沢諭吉門下の逸材」と言われています。明治3年17歳の時上京し慶應義塾に入り福沢諭吉の門下生となりましたが、2年経過したころ親一人、子一人の境遇(弟二人は若死)で離れ離れで暮らすことに耐えられなくなった母親から帰郷を促す便りが届き、後ろ髪を引かれる思いで母親の元へ帰りました。学業は中断しましたが茂吉の才

能を高く買っていた諭吉は、その後も茂吉との交流は続き生涯指導を受けたと伝わります。

荻伏に入植後、すぐに草小屋の集会所を建てました。茂吉は毎日曜日を安息日として仕事を休み、この集会所に集い道徳とキリスト教の講話を聞くとともに、福沢諭吉から受けた精神をわかりやすく入植者たちに伝えたと言われています。

次に「同盟規則」第17条に「社員は各自奮発勉励して永続の方法を謀り同盟者は子孫永々同心協力して小にしては各自の生産を経営し……」とされ、設立当初から赤心社の永続を視野に入れた経営が社是として掲げられていることに感じ入りました。現代では組織の永続性を前提に経営が成り立っていることは当然のことですが（最も一つの組織が100年以上継続することは余り例を見ませんが…）、これらの永続した要因の一つとして次世代への引き継ぎがあり、次の人物の存在が大きいのではないでしょうか。

創業者世代から次世代への引継ぎ

赤心社と言えば「鈴木清」、「澤茂吉」の二人が語られることが多い中に於いて、この訪問期間中に、もう一人の三田出身の人物「向井祐蔵」も多く語られているので紹介します。

向井祐蔵

鈴木清は赤心社の創業者として何度も北海道に足を運び経営の基礎を築いた人物、澤茂吉は現地で入植者と寝食を共にしながら現在に継続する基礎を築いた人物として浦河町役場荻伏支所前の胸像で偉業が讃えられていますが、もう一人の人物「向井祐蔵」は明治42年（1909）澤茂吉亡き後、現業地総轄支配人となり昭和5年に赤心社二世世代にバトンタッチするまで現地で陣頭指揮を執り続けた人物であり、三田では一部の郷土史愛好家の間で取り上げられる程度でした。

訪問中お聞きした話では「開拓当時の日高支庁長であった西忠義は、何かあると“澤を呼べ”と言って何でも澤茂吉に相談して事を決めた。一方、向井祐蔵は第一線から身を引いた後でも、荻伏村の人達から何か重要な事が起きると必ず意見を求められた村の重鎮であった。」と二人の人物評を語って下さった。

向井祐蔵は元治元年（1864）三田藩士向井央の四男として生まれ、小学校卒業後神戸に出て鈴木清の経営する缶詰製造会社で働いていましたが、明治15年（1882）年5月僅か18歳の時、兄の鉦太郎と共に赤心社に入社し、澤茂吉に随伴し浦河町荻伏村に入りました。この辺りについて現地の人は「向井祐蔵は僅か18歳で荻伏に来たため、彼の足跡は三田には残っていないのでは。したがって、三田で語られることが少ないのではないでしょうか。」と語られていました。

明治24年赤心社牧場主任、明治38年赤心社荻伏出張所會計主任、そして明治42年に澤茂吉が没すると副社長心得、荻伏出張所支配人、明治43年荻伏村が独立自治体となるや第一回の村会議員に選ばれ、その後25年間その任にあたりました。その間、自治体と赤心社

の間に立って公平に両者を調整し円満に発展させる道を示し住民の絶大な信頼を得ました。

そして、昭和5年澤茂吉の子息で教育者として人望を集めていた澤吉夫が荻伏尋常高等小学校の校長職を辞して赤心社の経営に携わるようになるまで陣頭指揮を執り、バトンタッチした後も休養に務めながら赤心社取締役として赤心社を見守り続け、昭和18年5月80歳で永眠しました。

荻伏開村碑

明治十三年舊摂州三田藩士鈴木清公國北海道拓植創設赤心社組地千
日高國浦河郡荻伏村移住十五年五月同志澤茂吉招致兵庫愛媛廣島縣人
八十餘名開墾是為本部之開基又當時樹木陰森荻蕭萩熊笹茂伐除之開拓漸進産業隆興而子孫
焉両者同心協力新墾著茂吉茂吉親苦忍辱之間拓漸進産業隆興而子孫
育子宗教能教力於等倫四十三年内務大臣来村為視察又今也人家約一千
子孫地畝満五千畝里蹄嘶鶏鳴牧場五千畝里蹄嘶鶏鳴牧場又耕地
以敬慶而樂武平育益前人之慈德又賛成後人有術者式也右様以銘焉
表之子孫景慕前人之慈德又賛成後人有術者式也右様以銘焉
昭和十年九月　荻伏村　向井祐蔵　撰

「開拓記念碑」と裏面の「荻伏開村碑」の碑文

澤茂吉を団長とする開拓団が当初に入植した地に昭和10年9月「開拓記念碑」が建立され、この碑に揮毫は浦河支庁長西忠義、碑文は「荻伏開村碑」として格調高い漢文で向井祐蔵が寄せています。すなわち

『明治13年、旧摂州三田藩士鈴木清は北海道開拓を計画して赤心社を創設した。そして日高国浦河郡荻伏村に入り地勢を調査した。ついで15年5月赤心社同志澤茂吉は兵庫、愛媛、広島県人80余名を招致して開墾に従事した。この時をもって荻伏村開基とする。

当時は樹木密生し萩や蘆が叢生し熊や狢、狐などがすんでいた。それ以来入植者達は一致協力して樹木を切り倒し茅を焼き払い土地を拓き……中略……現在は人家約一千にも及び耕地や牧場は数里にも及ぶ広大さを有し、鶏や犬の遊ぶ様子や美田良畑を遥かに望み盛えて村人達がその生活を喜び村の平和を楽しむことが出来るのも先人達が神を敬い、国にその恩を報いんがためと云う、努力のおかげである。…以下略…

昭和10年　9月　荻伏村　　向井祐蔵　撰　』

『赤心社』は創設者・鈴木清および彼に請われて現地で開拓者の指導、教育に尽力し柔軟な経営手法と入植者の人望を集めた澤茂吉の二人を抜きにして語れませんが、二人の亡き後の入植者二世世代へ引き渡す役目を担ったのが向井祐蔵であったのではないでしょうか。二世世代は創設世代に比し増しても劣らない程大きな信頼を得ると共に、北海道の大地に根を下ろしていった世代ではないでしょうか。

向井祐蔵から引き継いだ澤茂吉の子息澤吉夫と澤幸夫、そして澤幸夫（洞爺丸事故に遭遇し死去）から引き継いだ向井祐蔵の子息塩出宇吉の二世世代へと赤心社の精神は引き継がれ、その精神は現在の世代まで脈々と引き継がれていることを実感した訪問の旅でした。

（この他二世世代では、明治29年に澤茂吉から荻伏村村医として招聘された竹内（たけのうち）雄四郎（元三田藩医の家系）の子息、竹内鼎（かなえ）も教育者また荻伏村村長として村民の敬愛を受け、現在でも「竹内鼎先生」として語り継がれています。）

2．赤心社とキリスト教

廣山雄一

(1)赤心社訪問のいきさつ

私の知る赤心社は、旧三田藩士の鈴木清が中心に多くのキリスト教徒が作り、失業した武士や三田出身者を引き連れて北海道に渡り、艱難辛苦に耐えながらも開拓事業に成功した結社のひとつと言う程度の拙い知識でした。

しかし、武士団による北海道開拓を扱った吉永小百合主演の映画「北の零年」を見て以来、赤心社のことがずっと心にあり、昨年9月、やっと歴ネット仲間6人（池田・廣山・福富・藤田・山口・若林）は三田の先人が開拓した北海道浦河を9月20日訪問しました。鈴木清等が踏んだ土の上に足を置いたときはさすがに感無量となりました。同時に、多くの困難をものともせず開拓民と一丸となってこの広大な大地を開拓した強い信念とエネルギーの基となったキリスト教精神に触れたいと思いました。

(2)赤心社の出来た背景

明治初期、政府は北のロシアの南下と欧米列強の植民地政策に危機感を抱き、いち早く殖産産業と富国強兵策を推し進め、その一環として官の屯田兵制度と共に民の北海道開拓事業に乗り出しました。

他方、内地では明治4年の廃藩置県により多くの武士が失業し全国的に反政府運動が起こり世情不安は広がっていきました。

政府はその不満対策に北海道開拓事業政策「農具料補助・現地まで運搬無料・航海中の食事付・渡道後も玄米援助・薬代無料・酒支給（三年間保証）」を打ち出し、全国各地で北海道開拓移民を募りました。その結果、全国各地から移民団が北海道を目指し渡道しました。

その後、東北各地の貧民旧武士の移住、屯田兵の創設と移住がありましたが、どうも定着率が良くなかったようです。そこで政府はいろいろ特典を与えて団体移住を奨励しました。

赤心社は団体移住の初期の段階で創設されました。

赤心社は岡山の神官修業中の「加藤清徳」が鈴木清にもちかけたものが始まりと言われています。加藤はキリスト教が盛んな神戸に来て論争し、キリスト教徒にギャフンと言わせたかったが議論をするうちにキリスト教に感銘を受け終には洗礼を受けることになったと伝わります。

加藤と鈴木は北海道開拓の夢が合致し、早速鈴木が趣意書を起草し同盟規則を作って有志を募りました。このあたりの話はまことに明治ロマンを感じさせます。

西南戦争後もまだまだ社会不安が続く中、加藤と鈴木は明治13年8月「赤心社」を結成しました。鈴木は「この事業はキリスト教精神に基づいた理想郷を建設するもの」考えていました。

赤心社は全員がキリスト教徒ではありませんが、その開拓精神はキリスト教主義にありました。「赤心」とは真心であり神に通じる言葉です。

「貧しい中でお互い欲を制し、忍耐し助け合い、寒さや苦労に耐え、開拓すればやがて自作農になれる夢を持ちがんばろう」との精神が出発点であったのではないでしょうか。

赤心社は　社長・鈴木清　副社長・加藤清徳、株主には元三田藩主九鬼隆義、元三田藩大参事白洲退蔵など多数いましたが、純粋に民間の事業家の手による異色の開拓団でありました。

(3) 開拓地「西舎（にしちゃ）」・第一次開拓団の入植（明治14年5月）

団長・加藤清徳以下53名（広島の35名が中心）。

加藤はこの前年9月に開拓地探しに一人派遣され、函館から石狩周辺を調査するも適地は既になく、日高の西舎を選定する。開拓使から10年間土地の無償借地の交渉に成功した加藤は厳しい寒さを掘っ立て小屋で一人越冬し第一次入植団を待つ。

第一次開拓団が入植した西舎の現在（JRA展望台から望む：現在はJRA日高育成牧場の隣接あたり）

翌年5月西舎に向かった第一次入植団は悪天候で海が荒れ半月以上到着が遅れ、その間、船内で腸チフスが流行り、家具や農機具を載せた船は択捉島まで流され田植え期を逃した。生活難に陥った入植の人々は開拓意欲を失い農業を中断し漁業に出稼ぎに出て加藤を悩ませました。

団長加藤の心中は察するに余りあります。まことに不運としか言い様がありません。鈴木がそれを知って9月に駆けつけ、加藤と今後の対策を話し合いました。

鈴木や第二次入植団長・澤茂吉の功績などに比べて、加藤の悪天候による不運や苦悩にはあまり触れられていないのは何故なのでしょうか。失敗もありましたが、それが下地になって後の成功を実らせた加藤の苦労を忘れてはならないと思います。

第二次開拓団の沢茂吉が入植後、澤が副社長に昇格し、加藤は副社長から雑務係へと降格されたと伝わりますが実際はどうだったのでしょうか。この3年後には赤心社も退職しています。このことについて鈴木社長は「加藤副社長がたまたま落馬して腰を病み、16年遂にその職を辞す」と述べています。

(4)第二次開拓団の入植(明治 15 年 5 月)

鈴木は西舎を諦め開拓地を元浦川流域に変更し団長に澤茂吉を抜擢し、三田から後に澤の後継者となる向井祐蔵等を随伴し、83 名の開拓者と入植しました。入植した年の 10 月、澤は今後の運営方針として３つの「使命宣言」を行いました。即ち

① 未開の地を拓きて産を殖すこと　②宗教の自由を重んずること　③品性を修養し、人格を陶冶し、一旦緩急あらば北門の鎖鑰たらんとことを期すこと

澤茂吉

そして、澤は入植後に直ぐに取り掛かったことは住居となる掘立小屋と共に赤心社連帯の象徴となる草葺の集会所を建設でした。日曜日は安息日として仕事を休み、集会所に集い、神に祈りを捧げ、農事や日常の悩みを語り合い、道徳とキリスト教の講話を聞く場でした。(日曜日以外は子弟たちの教育の場として使用)

澤はキリスト教精神「団結・博愛」を基に着々とキリスト主義を赤心社に土着させていきました。

また、時代状況を見極め、現実に即した経営・農業改革と近代的経営の基礎となる複式簿記を取り入れました。

(5)鈴木清のピューリタンイズム(キリスト教精神)

鈴木清は、嘉永元年（1848)、三田藩江戸詰の藩士の長男。幼児期より俊才の声が高く、藩校造士館に学び文武両道で、特に馬術を最も得意としていたと言われます。

明治元年（1868）父は隠居し、家督 50 石を相続し、この年蘭学者川本幸民が息子清次郎と江戸から三田へ帰り、「英蘭塾」を開塾すると、そこで清次郎に就いて「英学」を学びました。

明治 5 年夏当時神戸でキリスト教の布教活動をしていた宣教師デービスが有馬温泉に避暑にやってきたとき、3 人の三田の若者が訪問しました。これが、キリスト教との出会いとなり、3 人の若者の一人が鈴木清でした。

明治 6 年、鈴木は神戸に出て宣教師デービスに就いて神学を学び、併せて英語の研鑽を積み、後に神戸女学院の創設者となるタルカット女史の日本語教師役を勤めました。

明治 7 年 4 月 19 日に志を同じくする同志 11 人と共に摂津第一基督公会（清教徒派）設立し、同時に洗礼を受けました。

清教徒の思想はアメリカの「自由と人権と寛容」の思想を生みましたが、それは自治的村落共同体の誕生、直接民主制で教育を重視した正に鈴木の思想でした。

明治 8 年神戸ホーム（神戸女学院の母体）開校に際しては、鈴木清名義で土地を買い受け設立資金の寄付金にも協力しています。

鈴木清が興した「牛肉缶詰業」

明治 11 年当時海外製諸種缶詰類の輸入が巨額に達し、日本の正貨が流出するのを嫌い、自ら牛肉缶詰業を開始しました。この業は大いに発展したと伝えられ、明治 12 年には神戸区会議員、神戸商業会議所議員、赤十字社支部幹事等を歴任しました。

明治 13 年以降の赤心社社長としての活動は本冊子のとおりでこの稿では省きますが、

明治 17 年からは福沢諭吉からの依嘱により旧藩主九鬼家の家令となり、家政整理に 20 年余の任を果たしました。

大正 4 年（1915）脳疾のため他界、享年 68 歳。

(6)浦河・荻伏の鈴木清

鈴木の 68 年の人生の後半は、ほとんどがキリスト教主義生き方でした。

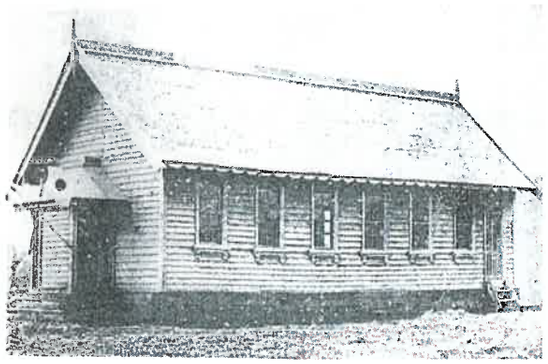
厳しい開拓と戦いながら、乏しい資金繰りと変わりやすい人心に神経をすり減らしながらも自分のすべてを神に捧げ無視無欲で人のために一生を通しました。

鈴木は神戸にいながら 13 度も浦河に出張し、天候不順や害虫被害に耐える澤副社長や働く人々を粘り強く励まし多岐にわたってアドバイスしました。澤もその期待に応え、みごと畜産・樹芸を加えた混同農業へ転換に成功しました。

その底流にあるのは鈴木、澤の「神への感謝と信頼を忘れず、愛と忍耐と決断力のキリスト主義」といえるでしょう。

(7)澤茂吉の実行力

赤心社の設立趣旨書には「貧民救済・徳育重視・愛国主義」を揚げています。他の開拓団との違いは「徳育重視」に力を入れていることだと思います。澤茂吉は未開地開拓を目的とする赤心社の柱に子供から大人まで「キリスト教的品位と礼儀（徳育)、愛」を教えました。



建てられた間口 3 間、奥行 7 間の「学校兼会堂」(明治 17 年暮れに完成)。明治 19 年浦河公会設立式が行われた。

そして清教徒に倣い厳しい開拓には精神が第一と考え、赤心社の規則に「毎日曜日に説教や討論を重ね知識の進歩と道徳を治める」と定めました。

赤心社の役員の多くはクリスチャンでありましたが、決してキリスト教を人々に押し付けず日曜集会の出席を義務としました。これは人心掌握のためやむをえない対応だったと思います。

明治 18 年に「学校兼会堂」を建設、「会堂」は翌年には「浦河公会」(教会）として神戸からギューリック宣教師を招き設立式が行われま

した。

こうして鈴木社長・澤副社長の言動はキリスト教的精神から発せられ、やがて愛と平等と寛容の精神が開拓民に広がり、幾多の困難を乗り切ることができました。

(8)その後の赤心社

その後、鈴木・澤の赤心社は農業・酪農・教育、共同体と広がり他には比較できないほど発展していきました。

赤心社は会社とキリスト教を分離していますが、実質的にはキリスト教主義を大胆に取り入れていました。たとえば聖堂を建て、牧師を育て、毎日曜日には全員を集会に参加させキリスト教の講話（説教）をしてみんなの心を一つにしようと試みています。

明治 27 年新築された浦河公会（現在の元浦河教会）で昭和 58 年まで使用され現在は「北海道開拓の村」に移築されている。

「どんなに苦難に遭おうとも希望を捨てず前進」

「誠実に私利私欲を捨て会社の使命を遂行」

浦河の赤心社は一次も二次も三田出身者は一握りの数家族でした。しかし、その後も経営の中枢は三田出身者であり、その中で鈴木や澤を次いだ向井祐蔵をはじめとして、その後に続いた二世たちはさらにがんばりました。向井祐蔵、竹内雄四郎等多くの三田人は先人に優るとも劣らぬ活躍したおかげで赤心社が今日まで持続したのだと思います。その彼らをどんな時にも支えたのは、やはりキリスト教信仰であったのではないでしょうか。

(9)伝道新聞「理想郷」の発行

「浦河公会」（教会）は、明治 27 年新会堂が建設され、7 月 22 日に献堂式が行われ、明治 31 年には「元浦河基督教会」と変更され、現在の「日本キリスト教団　元浦河教会」へ続いています。

この教会は、昭和 9 年（1934）5 月 10 日を創刊号として伝道新聞として「理想郷」を発行しました。編集発行人は当時の牧師小川秀一師で理想郷社同人として赤心社の主要幹部であった向井祐蔵、澤吉夫、当時の荻伏小学校校長竹内鼎等が交替で記事を寄せていました。

この紙面は単なるキリスト教の伝道新聞というより、荻伏村の地域コミュニティ新聞としての様相を呈していました。村内の各種行事のほか慶弔関係から事件、事故関係、健康維持についての医師のアドバイス、村の税金納付状況、役場、学校の

人事異動、農業関連記事等で、現在の公共機関が発行する「広報」的な内容といっても良いような内容でした。

ただし、昭和 15 年になると戦時体制下にあって新聞紙の調達が困難になったことにより廃刊となりましたが、赤心社、キリスト教が地域社会に根ざしていたことはこのことからも十分にうかがい知れます。

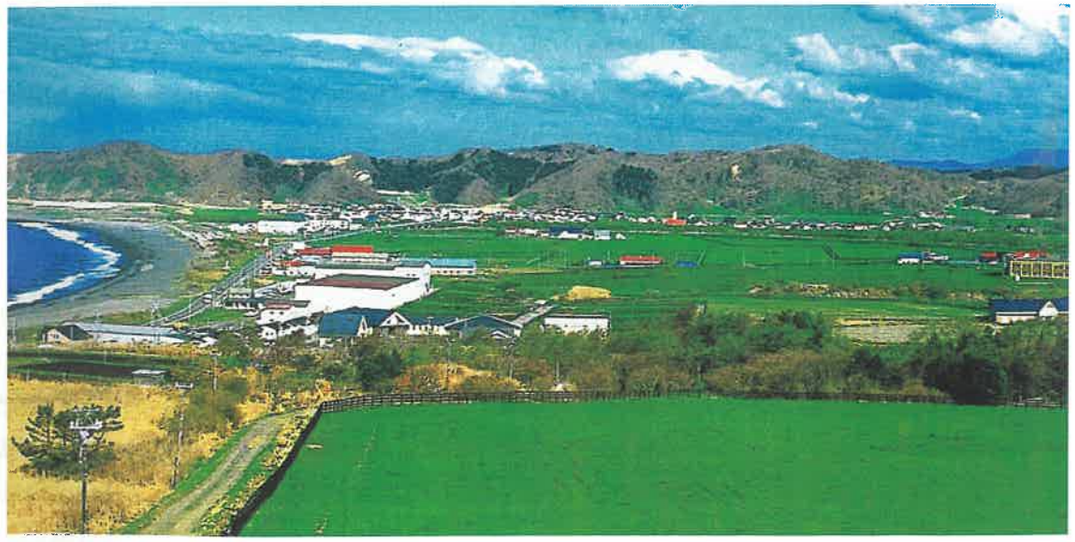
(10)最後に

元浦河教会を訪れて五味牧師の話を聞くことができました。その中で牧師は、浦河は人口も少なく、教会に通う人も減り、教会に通うのも遠方で信仰を守るのは大変だと言われていました。訪問した前日の日曜日礼拝者は 8 人だったそうです。

鈴木や澤を支えたあのキリスト教の情熱はどこに行ったのだろう？聖堂建築にかけたあのエネルギーはどこに消えたのでしょうか。

世界的に宗教離れが進んでおり、日本でも社寺から住職や神主が減少し、檀家や氏子も不安に陥っているといいます。これから先はどうなるのだろうと不安に感じながら元浦河教会を後にしました。

第二次開拓団が入植した地（荻伏）の現在　（前方の山裾に広がる町）



浦河町観光協会「浦河町観光ガイドブック」の表紙から転写

3．赤心社と教育　「愛荻舎教育」がもたらしたモノ

―「赤心社」と その教育が遺したもの―

藤田 裕彦

赤心社は、三田に住む我々に「強い関心を抱かせずにはおかない輝かしい存在」です。明治初期には珍しい株式会社組織でスタートした北海道開拓団・赤心社は、元三田藩士たちの強いリーダーシップによって成功し、明治14年第一次開拓団の入植以来、今日もなお北海道「日高郡浦河町」に現存しているのです。

今も残る「旧・赤心社」事務所

現在＝浦河町立郷土博物館の荻伏分館

赤心社が今日まで続いている理由は何なのか？赤心社は北海道の大地や浦河町に、どのような文化的な遺産を遺したのか？など色々な「知りたい事」が湧き出て来ます。

この謎を解くには、本をひもとく事も大事ですが、それ以上に、実際に浦河を訪ねることが必要だ、という声が盛り上がって赤心社に関心を持つ我々6人が北海道浦河町を訪ねました。

昨秋9月、2泊3日の旅を楽しんで来た6人の年齢は平均すれば75、2歳、既に後期高齢者ですが「歳には負けぬ若さと探究心に溢れる人」ばかりで、今更ながら尊敬の念を深くしたと云うのが一緒に旅をしての率直な感想です。

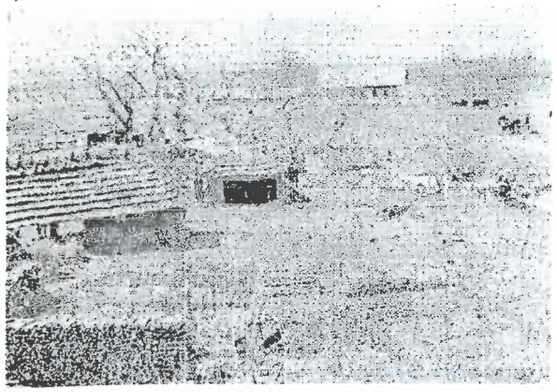
折角現地を訪ねたのだから、率直な所感を書き残し、三田市民にも赤心社の偉業を知って貰うことが必要、と意見がまとまり、6人が分担してまとめる事になりました。 私は柄にもなく「教育関係」を分担し、この一文に取り組みました。

理由は、今回の旅でお話を伺う機会を得た元浦河教会の牧師五味一さんの「荻伏村は大勢の教育者を全道に、いや全国に送り出し永く強い影響力を持った。その人間教育の場となったのが愛荻舎教育でした」との一言に、「赤心社教育の真価を見た」と思ったからです。但し、少なくとも江戸時代以来、日本人特に武士階級は、みな子弟の教育には熱心だったから、開拓団の多くも子弟の教育には注力した筈、決して赤心社だけが特異な存在であった訳ではないでしょう。とすれば赤心社の教育は他と何が違っていたのか？教職経験などない私が非力は棚に挙げて、この辺りまでも考えてみたいと願ってのことです。(既に歴史に属する方々の敬称は略します)

(1)住居と同時に「集会所」を建てた赤心社

「赤心成功の一因は愛荻舎教育にもあった」とは、多くの研究者が等しく指摘する処です。しかしそこに至る赤心社の歳月の中には注目すべきものが点在するように思います。まずそれらを見てから「愛荻舎教育」の説明に話を進めます。

北海道の斧鉞を知らぬ原生林の中での茅屋生活は、決して健康的なものではなく、巨木の伐採からはじまる開墾作業は、極寒との生を賭けた戦いであり、言語に絶する過酷なものでした。ましてや狼や熊が家畜を襲うなど、恐怖が身近に迫るなかでの難事業でした。



明治 23 年頃の開墾地　奥に会堂兼学校の建物が見える☆

第二次開拓団として明治15年に荻伏に入植した澤茂吉率いる42戸83人の移民達には、まず住む処が必要で、茅葺き屋根の掘建て小屋を建てました。が、同時に2間半に5間の草葺の集会所を設けています。

赤心社開拓団がユニークだったのは、日曜日は安息日として一切の仕事を休んだこと。この日は全員が集会所に集って神に祈りを捧げ、農事や日常の悩みなどを語り合い、道徳とキリスト教の講話を聴いた事。そのために集会所が必要だったのです。当時の彼らには、ここで使命を再確認し、厳しい大自然との闘いに勇を奮って立ち向かう事が必要だったのです。

リーダー澤茂吉は多忙の中でも、聖書研究を行ない、豊かな愛情に満ちた理想郷を築く為、みなの気持ちを通い合わせ仲良く暮らせるように努めました。

副社長 澤 茂吉　優れた指導力で開拓を成功に導いた

この茅葺小屋は開拓者たちの連帯の象徴でした、と同時に日曜日以外は子弟たちの教育の場所でした。ただ草葺小屋での寒い冬はとても耐えがたく、十分な教育など出来ない状態でした。せめてもう少しマシな「学校兼会堂」を建てたいと云うのが、みんなのささやかな望みになっていきました。

入植直後の明治16～18年は特に厳しい状況でした。今日のような台風予報などない時代ですから、突如暴風雨が襲いかかって掘建て小屋の屋根を吹き飛ばしたり、バッタの大群が襲来して植物全てが食い荒らされ、茅葺小屋の屋根まで食いちぎられて甚大な被害を受けたりしました。加えて3年連続の冷害が凶作をもたらしました。そんな中で起った経済恐慌による全国的な不況は、入植地を直撃して入植者の希望を打ち砕いただけでなく、赤心社と云う開拓会社自体の存続までも危うくするような大きくて深刻な影響を与えました。

凶作、経済恐慌と次々に押し寄せる苦難は、一歩誤れば致命傷にもなりかねないもの。農機具類は錆びつき食糧にも事欠く状況を何とか乗り越えることが出来たのは、澤副社長が、毎日曜日に一同を集会所に集め、農事や道徳を語りかけることを忘れなかったからです。「人を植えて土地と心を耕す」ことに努めた澤の優れた識見と実行力が、移民たちの開拓にかける決意を固めさせ、清貧にくじけぬ心構えを育てた結果でした。

うち続く凶作で貯蓄などない筈の移民達が協力を惜しまず、赤心社関係者や浦河村民らからも広く資金を集めて間口３間、奥行き７間の木造平屋建てを計画。赤心社の提供した500坪に建物が竣工したのは**明治17年末でした**。移民たちは待望の会堂に集まり献堂式(建物を神に捧げる儀式)を行なった。日曜日は集会に使い、他の日は学校とする意味で「学校兼会堂」と呼び、官の許可を得て「**私立赤心学校**」を開設しました。初代校長は第一次移民として神戸から来た堀内孫が務めました。のち明治24年３月にできる浦河尋常小学校荻伏分校へ生徒全員を引き継ぐまでの間、子弟の教育を担った赤心学校の誕生であり、荻伏では唯一の教育機関でした。

そして移民達待望の教会が設立されたのは明治19年６月の事。３年前に荻伏に来て、樹芸係兼赤心学校の教師を務めた田中助が、固辞しきれずに初代牧師を引き受けた結果で、浦河町史は「田中助の薫育感化を受けた村民は多い。明治43年に模範村として内務大臣表彰を受けたが、平和郷として今日誇りうるのは助の力に負うところ大」と書いています。

澤副社長は冷静に状況を判断し、独創的な手法で危機を突破して行った人物でした。例えば、生活必需品を買いたくても店舗など皆無であった当時「商店部」を設置したので、開拓団の移民だけでなく、一般の住民にも喜ばれて店は繁盛しました。また運賃が嵩んで高値になっていた醤油を、自家で醸造して安く提供できるようにして喜ばれた事など、細やかな心遣いが結実しています。これは赤心社にとっても、収穫した大豆を、大豆のまま業者に売り渡すよりは利益が上がる効果をもたらしました。

明治27年～昭和41年まで醸造した☆

このような努力の積み重ねにより、赤心社の基盤は確立して行きました。全力を会社経営に捧げた指導者たちは、物質的な報酬を求めず、社長や副社長の俸給も信じられない程の低額だったとの事です。茂吉は現地の最高幹部であるにもかかわらず、開拓当時、移民と同じ茅葺小屋に住み、同じ生活をしていました。むしろ七男四女に恵まれた澤家の生計は想像以上に厳しく、生活は貧しかったに相違ありません。当時の荻伏では、子供に上級教育を受けさせるには東京、神戸や札幌に出さねばならず、その費用の捻出だけでも家計は火の車だったと想像されます。茂吉が麦飯に大根を刻んで混ぜたカテ飯が好物で、来客があると引き留めてこれを振舞ったと云われるのもその一例です。

指導者の清貧は、移民だけでなく村民全体の生活の模範となりました。茂吉は常に人間としての修養を怠らず、良俗と人情細やかな荻伏村建設の精神的支柱となりました。国の視学官は、この地域の学校に教師を赴任させる時には、教師の人格を重視し、高潔な人柄と品行方正で、酒を呑まないことなどを基準に人選したといわれます。また函館や札幌辺りでは、荻伏小学校卒業生の就職が歓迎され、引く手数多であった、と云われますが、茂吉の率先垂範は、子供たちを薫陶し躾が行き届く結果にもつながっていったのでしょうか。

住民達は澤茂吉の識見と人柄に深い信頼をよせていました。彼はいつしか日高地方各方面の指導者に推され、道議会議員など50を超える公職に就いて力を尽くしました。学校、病院など住民に必要な施設を整え、道路、河川の治水事業や架橋など公共事業を進めるために奔走し、村有財産の造成をも図ったようです。

ところが明治41年頃夏頃、茂吉の額にできたしこりが次第に痛みを増し、重篤化します。副社長の仕事は向井裕蔵が代わって処理しました。翌春東京で入院したため、三男の吉夫が札幌師範学校に入学した喜びも共に祝えないままに明治42年9月15日57歳の人生を閉じます。志半ばでの澤茂吉の死は、移民や住民は勿論、浦河、日高、札幌、函館、神戸にも伝わり、衝撃と悲しみの波紋を広げることとなりましたが、赤心社の精神はしっかりと受け継がれて行きました。

澤　吉夫校長　退職後赤心社々長も

(2)「愛荻舎教育」とその影響

澤茂吉の三男吉夫は、大正二年札幌師範学校を卒業後、荻伏小学校に奉職し、同８年にはその人格と教育に対する識見を評価され、24歳の若さで同校校長になっています。同小学校には師範学校で２年後輩の竹内鼎もいて、吉夫に協力しています。その頃の吉夫は「荻伏の農業が冷害と連作から来る地力の減退に加え、経済恐慌による農作物価格低迷で、疲弊しきって危機的な状態にある。」ことを憂え、打開策を暗中模索していました。

その具体的な展開状況は、竹内が後年書いた「郷土荻伏の開発について」の一文が説明して呉れます。

愛荻舎農場の牛がいる風景

「当時、義務教育費は町村支弁。ところがどの町村にもゆとりなどなく、運動具が欲しい、簡易文庫に回覧する雑誌を備えたいなどと願ってみても予算は僅少。保護者会にも余裕など皆無の状態の中で、せめて農業科の実習農場からの純益金でもあればとの考えから、(動物好きの沢校長は)大正9年から6年ばかりの間、鶏、兎、豚など小動物の飼育を試みた。しかし設備の不完全や管理上の不備が多くて失敗ばかり。それでも農場からの収益が、僅かながらも教育費の潤いになって勇気づけてくれた。」と書いています。

ただ取り組みの結論は「小動物飼育の試みは地味改良の役には立たなかった」ようです。そんな模索を重ねた大正13年夏、竹内が受講して来た「デンマーク式農業」の報告を受けた吉夫は「地力回復を図るには、牛を導入して酪農を盛んにする他無い」と結論し、教職員とも協議のうえ乳牛の飼育を始める事にしました。再び竹内の一文です。

「牛を飼うとなると兎や豚などのように簡単には行かず、牛舎を建て、飼料作物を作るなど容易ではなかった。数年前に閉鎖した赤心社牛牧場から譲りうけた乳牛を飼っている家があったので、その乳牛を一頭借り受け、学校の物置の片隅で飼い始めたのが大正12年12月末でした」と云う経緯から、この日が荻伏小学校付属農場「愛荻舎」スタートの日となっています。澤茂吉が、開拓の初めから茅葺小屋で実践してきた教育理念を発展的に結実させたものであったとも云えるでしょう。竹内の一文はまた「翌15年春には学校の計画に同調して酪農経営を試みようとする農家12名が、札幌近郊から15頭の乳牛を導入、日高に於ける酪農組合の始まりになった」と、これが日高酪農の起源になった事も述べています。

また「学校では同窓会員の協力を得て35坪の牛舎を建て、純血の乳牛を買い入れた。その管理には6名の職員と1名の牧夫が当り、飼料作物の栽培は農業科の実習が担った」と、その後の体勢充実にも言及しています。

同時に「その出発は我が荻伏を住みよい楽土にするためであり、荻伏を愛する者を養成する場だから「愛荻舎」と名付けた」と命名の由来も記しています。

この辺が愛荻舎教育のポイントであろうと思いますので、若干冗長のそしりは免れませんが、敢えて愛荻舎において教職員と児童・生徒全員が取り組んだ実態を紹介しておきたいと思います。

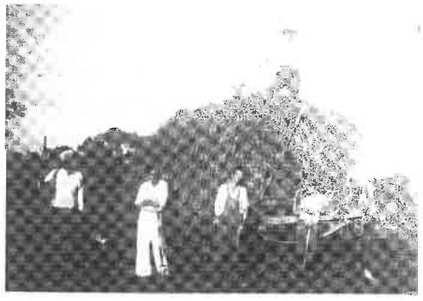
愛荻舎教育では、先生も児童・生徒も一体となり、学年に応じてそれぞれの作業を分担したことが分かります。

○馬による耕作、田畑の整地等の畜力を要する仕事や、水稲の播種、脱穀等の技術が必要、或は危険を伴う作業は常雇人か教職員が行ない、他の作業を児童・生徒が分担しました。

○高等科生徒＝農業実習を主体とし学科は副。春から秋の晴天の日は原則実習を行い、理論は雨天と冬季のみとしました。実習に理論づけた説明が必要な時は、圃場で臨床的に実施したようです。

○作業の分担は、小学5年＝兎、6年＝鶏、高等科1年＝豚、2年＝緬羊、養蜂の5班に分け、各2名の教師が指導し飼育しました。花園、菜園は女子児童・生徒が地域別に分担しています。

○大動物の飼育＝牛馬の飼育管理は常雇と教職員が担当したが、高等科生徒の実習としても飼育作業を行なっています。



昭和初期までは先生方も労働に汗した

○全校作業＝季節や天候によって放課後、学級ごとに農場作業を10～20分程度行いました。

このように全員参加で愛荻舎教育は進んで行ったのです。農場に作物を植え、いろいろな家畜を飼い、失敗を繰り返しながらも、開拓に役立つ実業教育を進めたのです。

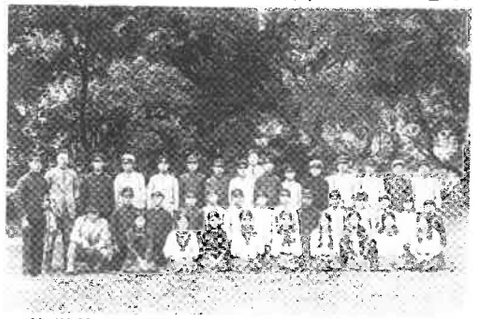
しかしこの教育を始めた当初は、道庁の学校教育関係者からの反対を受けることになりました。理由は

「実業学校でもないのに、多くの家畜を飼育し、広い土地で農場を経営するのは宜しくない」と云うモノでした。

吉夫校長は説得の為に何度も道庁に足を運び、「土の香に親しむ労働作業を通じて知と徳を磨く「知行合一」を目標にした教育」の必要を説きに説いて、やっと続けることができたのでした。

ところが日支事変から第二次世界大戦へ、と時局が進展しますと、一転して「荻伏小学校の教育こそ模範」と評価する声が高まり、文部省の督視学官がわざわざ視察に来て激賞したと云う話まで残っています。

但し、愛荻舎教育は、国の政策によって二転三転するようなものではなく、血のにじむような開拓作業から実践的に編み出されたものでしたからで、他からの評価の上下によって変わるようなものではなかったのです。



修学旅行の記念写真　北大の前庭にて☆

この酪農の実践は、村内でも最不適地といわれた愛荻舎農場の土地を改良し、一等地に変える効果を見せました。これによって各農家は、作物を育てるには、土地を育てる事が大事である事を理解し、当然、牛を飼い始める農家が増え、乳牛の仔が各農家に広がって行きました。澤吉夫の狙いは、見事荻伏の農家を苦境から脱出させたのでした。

愛荻舎農場の経営は当初こそ費用の捻出に苦しみ、採算も苦しかったのですが、後には経営も安定し教育的諸施設にも純益金が使用できるようになって行きました。

その成果は下記の通りです。

●昭和2年には修学旅行への半額補助をはじめている。当時は修学旅行自体が、日高管内の小学校では他に例がなかった。旅行で見聞して来たことの報告会は大いに盛り上がり、後輩たちへ良い意味の刺激を与えたのである。

●乳牛飼育を始めた荻伏村では、当時流行していた「富山の置き薬」の売り上げが半減したとか、児童の体位が全道1・2を争うほどまで向上した、との報告もあり、健康向上を結果したことが分かる。

●70歳以上の高齢者を対象に、開校記念日に敬老会を開き、農場でとれた米を搗いた紅白の餅を贈っている。

●児童文庫の充実や教職員の研究会講習会などへの参加旅費なども補助できるようになった。

澤吉夫は昭和5年に退職。赤心社支配人となり、父茂吉の遺志を継いで理想郷の建設に取り組んでいます。当時、牛乳管理方法など全く知らなかった日高地方に、酪農組合を設立し、製酪工場をつくって、日高酪農発展の礎としました。その後吉夫は、日高協力会議長など多くの公職や雪印乳業の取締役まで務め、社会施設の改善などに尽力し昭和25年病没し

てしまいます。奇しくも父茂吉と同じ享年 57 歳でした。

赤心社農場跡地の一角に建つ
「澤吉夫顕彰碑」

愛荻舎農場のあった一角に残る澤吉夫顕彰碑には「真の教育を求めて愛荻舎を創設し、子供らと共に、作物を培って人間をつくり、家畜を飼うことによって魂を養った。大正 14 年 12 月 28 日この碑の地で飼い始めた乳牛は、やがて日高酪農の発祥となった。教育に新しい息吹を与え、北方農業の確立に心を砕き一生を神と人に捧げて、信仰に生きた偉大な人」とあります。吉夫から校長職を継いで愛荻舎教育を推進した竹内鼎の撰文です。

このように愛荻舎の基本思想は、澤吉夫校長からバトンを渡された竹内鼎校長がしっかりと受け継ぎ発展して行きました。勿論全教職員の献身的で、全面的な協力あってのことであったのは言うまでもありません。

(3)国内だけでなく国際的にも高い評価

愛荻舎が国内はもとより、国際的にも広く評価されるようになったのは、昭和 10 年 8 月に東京帝国大学安田講堂で開かれた「汎太平洋新教育会議」(主催・新教育協会、後援・文部省、外務省、国際文化協会、帝国教育会など)で行った、当時の竹内鼎校長の「荻伏小学校付属農場の実際」と題する実践成果の報告によってでした。竹内はアメリカ、印度、エジプト、カナダ、タイ、フィリピンなど各国代表 51 名と、国内からの 250 名の参加者を前に、愛荻舎教育の実情を発表しています。その折、竹内が語った愛荻舎教育の概略を要約して下記します。

「愛荻舎教育の原点は、固い宗教的信念に結ばれた一団が、理想の楽土建設を夢見て明治 15 年荻伏に開拓に入った事に始まる。入植早々、会堂兼学校が建てられ、心の開拓を疎かにせず良風を育てた。明治 43 年には北海道で唯一の「模範村」として内務大臣から表彰を受けた事もあった。だが時の経過と共に、時代の風潮が平和な村にも押し寄せ、その実を失いかけてきていた時のこと。建村の大精神に立ち返りその維持発展を図るには、真の教育を充実させるしかないと考えた吉夫校長は「主知主義教育ではなく、大自然の土の香に充ちる労働作業を通して知徳を磨く」ため「愛荻舎」は作った。この農場の使命を考えると

竹内鼎・元校長
『愛荻の道』口絵より

① 道場としての農場＝働くことを楽しむ人・土に親しみ自然を愛する人・困　苦欠乏に耐える人をつくること＝「人の子の魂を養う道場」であること。

② 教育的遊撃隊としての農場＝教育的施設は多大な資金を要するが、一村の経済状態をみても多くを要求することはできない。本農場で出来る限りの収益を得れば、教育に充てることが可能になった。

③ 郷土産業教育としての農場＝出発点は郷土教育だが、郷土の産業指導の場でもありたいと願った。

④ 青年指導としての農場＝畜産、酪農の研究、経営を目指す者、遊学資金を得ようとする青年らを採用し、また青年学校の職業科の施設にも利用する。・・・等々が挙げられる。

最後に竹内が話したのは、愛荻舎教育 10 年の成果でした。「労働の習慣は、自己の職業に誇りを持つ意識を育て、土に親しみ自然を愛する気風が全村に流れるようになった。また学校給食や乳牛導入で牛乳を飲む機会が増えた結果、児童・生徒の健康状態が著しく改善された」、と述べています。

この報告が行われたのは昭和 10 年です。愛荻舎発足の大正 14 年頃から乳牛の導入が始まっていますから、昭和元年辺りから荻伏小学校独自の学校給食が行われたのかと想像されます。総体的にみてその先駆性には驚く他ありません。

なお 31 年間教職にあった竹内校長は戦後の昭和 21 年に退職しました。教育者として油の乗り切った 50 歳ころの事で、その胸中を去来したものは何だったのでしょうか。
実は、竹内さんの追悼文集とも云うべき『愛荻の道』に五味師の書かれた「竹内さんの歩んできた道」と題する解説を発見しました。「続けられなかった教員の道」という一節があり「君たちは祖国に一命を捧げろ、生死は共にする。と云っておいて、彼らは皆白木で帰ってきた。戦争がおわったら「気の毒だったネ」では心が許さなかった(要約)」と述懐された、とあります。当時の指導的立場にあった人々に共通する感懐であり、察して余りある「止み難い心境」だったのだろうと考えます。

その翌年には学制が変って六・三制が発足し、荻伏小学校と改称されました。高等科の生徒が新制中学に移ったため、小学生だけでは農場の維持は困難となった愛荻舎農場はその使命を終えました。労作教育として名を挙げた 23 年間の歴史に終止符を打つかのように、昭和 25 年 5 月荻伏小学校愛荻舎の牛舎が全焼してしまいます。竹内は退職の翌昭和 22 年、子弟たちに乞われて民選初代の荻伏村長に当選し、行政の面でも郷土発展のために多大な貢献を行いました。終戦直後の 50 歳の決断が、竹内さんに「荻伏の為に、もうひと働きする場を用意した」とは穿ち過ぎた見方でしょうか？

大正 14 年暮れに乳牛一頭からスタートした愛荻舎教育は、昭和 5 年に創始者澤吉夫から竹内鼎校長にバトンタッチされ、結局 23 年間続きました。その間、愛荻舎農場は両校長やその元で情熱を傾注した教職員たちの薫陶を受けた幾多の人材を生み出す母体となりました。荻伏に限りませんが、当時の厳しい経済状態の中、志を持つ有能な人材は、学費の要らない師範学校に進み、教職につく傾向が強かったようです。愛荻舎教育を受けた生徒たちも、男子は札幌、函館などの師範学校に進んだ生徒が多かったと伺います。教職の道に進んだ生徒たちが全道にひろがり、信念をもって赤心社精神を叩き込み、自らも体現して行った筈、と考えるのは、我田引水に過ぎるでしょうか？しかし、これが「北海道の教育界に強い影響力を持つ人材」を輩出したのは間違いないようです。

(4)北海道の教育界に与えた影響

元浦河教会を訪ねた折に、五味牧師が話された「荻伏村出身で愛荻舎教育を受けた人材が、教育界をリードした」との一言が印象に残ったのが、この小文をまとめてみようと思うキッカケになった、と冒頭に書きました。荻伏で今も語り継がれる言葉に「赤心社精神」があるとか。どんな苦難にも揺るがぬ理想を堅持して生きた「赤心社の人達の不屈の開拓者魂」を指す言葉のようです。それは「人間が生きるための基本姿勢」の教えであり、当然愛荻舎教育を受けた子供たちにも継承されている筈。むかし函館や札幌辺りで荻伏小学校卒業生は引く手数多であった、と云われるのも「赤心社精神」の薫陶を受けた人材が高く評価された証拠でしょう。北海道の教育界云々も同様で、愛荻舎教育が赤心社精神の発露であり、教育面で上がった実効であったとも云えましょう。

元・道教育長 沢宣彦氏(建設グラフ 2001 年 3 月号)

そんな目で北海道の教育界を見ると、昭和 53 年から 63 年まで北海道教育委員会の委員長を務めた安藤鉄夫さん(教育委員には昭和 47 年就任した)と云う浦河町(荻伏小学校高等科)出身者のお名前がありました。教育委員長歴 10 年を越し、豊かな人間愛と卓越した指導力を発揮した方と伺っています。

また澤茂吉の四男勇夫の御子息 澤宣彦さんは、平成 2 年まで北海道教育長を務めた後、留寿都村長を平成 9 年から 3 期務められた方です。『同汗同行の教育』の著書もある同氏が、昭和 62 年 5 月 23 日の北海道教育長・就任記者会見で、就任の決意を求められて語った内容が『北国に光を掲げた人々』に紹介されています。

「私の教育観の原点は次の三つ、と前置きして話されたのは、

①明治 15 年に祖父が北海道に入植し、私立学校を創ったこと。そこでは本道の困難な条件に挑戦するフロンティア・スピリットを必要とした。

②伯父が学校に農園を付設し、小学教育の中に農作業を入れて労働の尊さ、自然に対する感謝の気持ちを教え、子供の多彩な才能を認める教育を行なってきたこと。

③中学 2 年の時、広島におり、原爆に遭い、かけがえのない命の尊さと平和の有難さを風化させないことの三つ」とあった。

このような赤心社精神に培われ、愛荻舎教育で育った人たちが教育者として全道で活躍されたことも含めて、冒頭に書いた「赤心社の成功の一因は愛荻舎教育にあった」との見方を生みだしたのではないでしょうか。と同時に、赤心社精神を持つ澤吉夫・竹内鼎両校長が、「愛荻舎教育」を生み出し「知行合一」を実践するユニークな試みを行ったからこそ、北海道全体の学校教育にまで波及したのだとも云えるでしょう。これこそ「赤心社が北の大地に残した文化的な遺産のひとつ」である、と考える所以です。

このような愛荻舎教育の実践を見ると、教育とは何を教え、何を育てることなのか、と考えさせられるのは、私だけでしょうか。

4．赤心社と牧馬

池田洋介

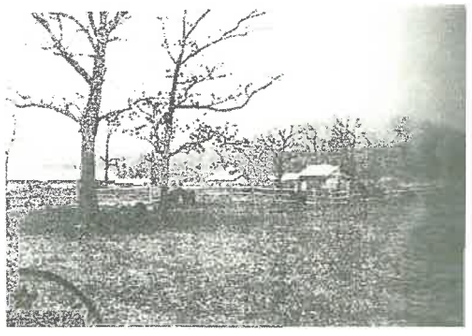
現在、北海道日高地方は、「サラブレット銀座」、「日本一の競走馬の産地」などと呼ばれています。また、澤茂吉は、日高馬産の先駆者・推進者等と言われていますが、どのように関わったのか、どのように貢献したのでしょうか？

赤心社入植以前

北海道に馬が現れるのは記録上では、江戸時代初期、本州より贈られたのが、初めてのようで、当初、初めて馬を見た住民は恐れをなしたというが、次第に使用にもなれて、増えていきました。用途は主として、運搬、農耕手段としての目的でした。幕末となり、幕府は馬牧と呼ばれる幕府直轄の施設により管理し、馬数も増加していきました。浦河では文久 2 年（1862）に浦河馬牧が完成したと推測されます。牧場の敷地は、西は浜荻伏、東は東栄、北は野深までででした。明治維新と共に開拓使の管轄となるも、明治 5 年（1872）には廃止となりました。浦河馬牧も廃止され、多くは、浦河や新冠に設置された新冠牧場（後の新冠御料牧場）に払い下げられ、これが日高地区での馬産の基礎となったようです。

新政府は開拓使のもと、北海道全体に積極的に馬の増産をはかりました。浦河は日高の支庁所在地となりました。外国産種馬による馬種改良にも積極的で、小型非力の馬から、農業や運搬に適した牧馬として完成していきました。開拓使から浦河等民間への払い下げも進み、牧草改良とともに馬数も増えました。

この日高地区では、農畜産技術指導者であり、獣医師でもあった、エドウィン・ダンの提案を受け入れ、明治 10 年（1877）、北海道の馬産の拠点を新冠に集約し、西洋式牧場として整備しました。最盛期には千数百頭もの馬が飼育されていて、既に始まっていた横浜根岸での洋式競馬に勝ち馬を送っていたようです。明治 20 年前後から管内に経営規模の大きな牧場が現れてきます。



赤心社牧場風景

赤心社の関わり

このころ（明治 20 年ころ）、赤心社は、荻伏での開発に目途はついたものの、「自作農創出」という当初の理念はくずれ、株主数の減少となり、また土地開拓だけでなく、農林業の付加価値増加のための混同農業（いわゆる多角経営）への必要性が生じていました。これに目をつけた澤茂吉は、「土地配分会社」

から「農地経営会社」への転換を図っていくことにしました。そこに着目したのが、牧畜であり、なかでも馬は、政府が農業近代化政策の一つとして、馬種や牧草の改良に積極的で、特に、日高地方はその適地として、浦河近辺の新冠や静内に官営の研究牧場が設置されていました。

また、この時期、競走馬の普及が地方に始まっており、宮崎、鹿児島、福島などに競馬場ができていました。

澤茂吉は、明治 20 年（1887）、社業として牧場を創設し、道産牝馬と南部産種雄馬を入れ、のちに北海道庁より種馬の管理を託され、新冠御料牧場より良牝馬を購入し改良をはかりました。また、社員を真駒内種畜場にやって技術を習得させ、仔馬の繁殖とともに厩舎の改築、牧場の整備に努めました。このような赤心社の取り組みは付近の住民にも馬産を奨励し、種付け料を無料にし、また良質の牝馬を安く買えるようにしたので馬産への意欲は日高全体に広まっていきました。これが全国的に知られる名馬日高駒の発祥になりました。

明治 21 年になると、早くも牧馬 220 頭余、牧牛 41 頭、豚 24 頭に増えました。その翌年、かねてから野深の牧場に隣接する土地の使用許可を道庁に申請していたが、十万坪の貸下げを受けることができました。これによって、土地会社と牧畜の基礎はいっそう固まりました。

西忠義日高支庁長と澤茂吉の二人三脚

明治 20 年（1887）澤茂吉は混同農業の一環として、この地の風土が牧畜に適していることを察し、前項の記述したように「牧畜業」へ進出し、社有牧場の経営とともに、その成績を村民に説明し馬事事業の奨励を行いました。

明治 34 年（1901）浦河支庁長として赴任してきた西忠義は、既に澤茂吉等の努力により広まっていた馬産を基幹産業へと国営日高種馬牧場の浦河設置に動き、浦河着任の翌年には日高管内の実業家を集め、日高実業協会を創設して自ら会長として農商務大臣へ国営種馬牧場の浦河設置を上請し、種馬牧場開設のための陸路整備を訴え、整備を進めました。

かくして、明治 40（1907）年、日高種馬牧場が浦河に設置されました。これに協力し、西支庁長と二人三脚で推進したのが日高実業協会副会長の澤茂吉でした。これが後々「サラブレッドの里」、「サラブレッド銀座」と称される所以となったと云われています。

西支庁長は、何か事あるごとに「澤を呼べ」と支庁に呼んで相談して事を進めたと伝わります。

日高の牧馬

日清戦争（明治 27）や日露戦争（明治 37）では、物資の運搬や大砲の牽引に国産軍馬を用いたが、小型で力不足のため、途中で落伍する軍馬が多かったようです。このため、政府は軍馬改良のための長期計画を策定。国有種馬馬牧場の設置が盛られ、全国の候補地の中から唯一選ばれたのが浦河の西舎。これは支庁長、西忠義の功績が大きく働いていました。明治 40 年（1907）には、日高種馬牧場が西舎に完成し、馬産地浦河の基礎がつくられました。政府は名目上、農政や軍務、輸送手段としての目的から品種改良に積極的に関与しました。一方民間では、地方に広がる競馬熱への対応として軽種馬の生産に力を入れていきました。

日高地方でもこの時期から、サラブレッド種牡馬を繁養し、本格的なサラ系馬の生産がはじまりました。

軍馬としての質の低さの問題から日露戦争のころに、豪州から多頭数の馬が輸入され、牝馬 3500 頭のうち、397 頭が北海道に分配されました。血統は不明ですが、サラブレット系も含まれていたようで、これが、軍馬、サラブレット系の改良に大きく影響したと言われています。

大正に入り、経済不況の波がこの地方にも押し寄せ、大正 5 年（1916）、赤心社としては、牧畜業を全廃し、牧場の地目を農耕地に変更しました。荻伏周辺としては、牧牛や緬羊の飼育が奨励されて増加する一方、西舎、新冠、静内等と共に軽種馬を中心に地道な努力で牧馬が継続されたと思われます。

終戦後、昭和 21 年（1946）、「日高種馬牧場」として産業用馬（サラブレッド含む）の生産を中心に業務転換し、昭和 40 年（1965）、に日本中央競馬会日高育成牧場として独立しました。

その後周辺の用地を買収し、育成調教施設が大規模に整備され、現在にいたっています。

大正から昭和にかけて、赤心社は牧畜業から手を引いていますが、荻伏周辺の牧場での軽種馬（競走馬）生産への意欲は高く、周囲環境にも恵まれ、多くの優駿を輩出しています。

明治 20 年代、澤茂吉が牧馬に注目し、部下に研究させ、荻伏に馬を入れたことに起因しているとも言えるでしょう。

—有馬記念と三田（兵庫県）の関係について—

浦河・谷川牧場のシンザン像

有馬記念は、創設者の有馬頼寧の名前から名づけられている。有馬頼寧は、旧久留米藩主有馬頼万の長男として生まれた。久留米有馬家は、徳川時代初期、三田を統治した有馬則頼　豊氏の末裔である。

則頼は関ケ原の戦いで功を立て、三田に封ぜられた。没後、三田は息子豊氏の所領とったが、１６２１年、勲功により久留米に移封された。

競馬史に燦然と輝く五冠馬シンザンもここ浦河町の荻伏の生まれである。人気、実力ナンバー１といわれる有馬記念の勝馬としても有名である。　浦河町荻伏の松橋牧場で生まれ１歳から荻伏牧場で育てられ競走馬引退後は郷里浦河町の谷川牧場で余生を送った。

—日本の競走馬の歴史—

長谷川貞信筆「摂州神戸西洋人馬駆之図」

文久２（１８６２）、横浜居留地にいた居留外国人のレクレーションとして、現在の競馬の原型となる近代競馬が始まった。明治２（１８６９）、神戸の生田神社の東側の競馬場でも居留外国人による競馬が開催された。明治期、東京をはじめとして、函館、新潟、宮崎など地方でも開催され、人気があったが、明治４１年馬券発行禁止令が出されて一気に下火となった。大正６年ころより民間に軽種馬熱が台頭し、馬を所有するものがふえ、大正１２年、新たな競馬法が成立すると、サラブレッド生産熱が著しく高まった。

大正、昭和前期を通じて、馬券発行の賛否を巡って議論をつづけながら全国各地で開催される。戦時中は、ほとんど実施出来ない時期もあったが、戦後昭和２９年日本中央競馬会が創立されて以降、地方競馬とともに繁栄の道をたどる。

5．赤心社と医療（竹内（たけのうち）雄四郎の渡道）

若林　良

竹内雄四郎の渡道

竹内雄四郎

明治５年に開拓使によって支庁が置かれた浦河は、開拓民のための医療施設も他地域より早く設けられていましたが、赤心社の入植した荻伏村においては、悪戦苦闘の結果、ようやく開拓が軌道に乗り始めた明治 20 年 4 月に、村立の診療所が開設されました。しかし初代所長の須田医師が７年後に退任した当時の医師不足は深刻で、後任の片岡医師が 2 年の契約で赴任してくるまで 3 か月の無医村状態がありました。村民の大半を占める赤心社社員、なかんずく支配人澤茂吉にとって、2 年後の後任村医の確保は至上命題でしたが、片岡医師の離村後 6 か月の村医不在状態が続きました。かねてから澤は同郷・三田出身で同じ教会に属していた同志社病院の竹内医師に医師の斡旋を要請していましたが、澤の苦境をみかねて竹内自身が、単身荻伏診療所に着任してくれました。澤の感謝はいかばかりであったでしょう？

明治 29 年(1896) 12 月京都より赴任した竹内雄四郎は以後明治 43 年(1910)まで 13 年 6 か月勤務し、この地で逝去しました。以後荻伏診療所には、大正 8 年まで平均在勤 1.7 年という短期サイクルで 5 人の医師が交代勤務しています。14 年弱の診療生活で赤心社と荻伏村民に多大の恩恵をもたらした竹内雄四郎の人物像に焦点を当ててみました。

竹内家は、代々三田藩医として、屋敷町に居を構えていました。赤心社第二次入植団を率いた澤茂吉宅、澤の番頭役であった向井裕蔵宅も屋敷町にありました。特に向井家は竹内家と隣同士でした。

竹内家 10 代目当主玄林は、百石を持って九鬼隆義公に召し抱えられていました。彼には男子がなく、長女小章(こゆき)の婿として家督を継がせるべく、かねてより神童の噂の高かった篠山藩箕浦遊亀の三男雄四郎を養嗣子に迎えました。雄四郎 19 歳の時でした。

当時の三田藩は明治維新を先取りした英明な藩主隆義公のもと、近代化への熱気が横溢していました。藩の医師たちも、西洋医学を積極的に取り入れようと、藩主の招聘した宣教医師ジョン・カッティング・ベリーの指導を受けました。

竹内玄林は、英語教育の重要性を痛感し、雄四郎(19 歳)を開設したばかりの京都同志社英学校に学ばせ、1 年後には神戸病院医学所においてベリーの元で直接西洋医学の教育を受けさせました。ベリーが岡山県病院の設立と指導のために岡山に移ると、雄四郎(22 歳)は私立浪花病院・私立大阪産科病院等で研鑽を重ねることになりました。

このころの三田では、西欧文化を学ぶ中でキリスト教へ傾倒する若い藩士が少なくなく、赤心社の鈴木清・澤茂吉も洗礼を受けました。 赤心社の第 1 次入植団が神戸を発って浦河に向かった

明治 14 年、雄四郎(25 歳)は、摂津第三基督公会(三田教会)で受洗し、澤茂吉が長老格として信仰の導きにあたりました。翌年赤心社第 2 次入植団が結成され、リーダーとして澤茂吉・向井裕蔵らが北海道へ出立するに際し、彼らを激励する壮行会が開かれたのは、竹内雄四郎宅でした。

雄四郎(27 歳)は、ベリーの助手として岡山に赴任することになり、翌年小章と結婚、岡山で新生活をはじめました。ほどなくベリーは京都に呼ばれ、同志社病院設立にたずさわったのち、同志社病院院長となりました。雄四郎(31 歳)も京都に居を移し、同志社病院に勤務しましたが、40 歳の時同志社病院は廃止となりました。

かねてから北海道に渡った赤心社の澤茂吉から、荻伏の村医の斡旋を依頼されていた雄四郎は、周囲の医師に声をかけていましたが、無医村となった荻伏村の窮状を知り、意を決して、自ら赴任することにしました。

雄四郎(40 歳)は 2 年間の約束で単身渡道して、荻伏診療所で診療を開始しましたが、2 年後も荻伏の住民・特に赤心社の人々との絆を断ちがたく、荻伏残留を決意。京都から妻子(妻小章、次男章雄、三男鼎)を呼び寄せました。

家族の移住後、11 年の長きにわたり村民の診療に尽すかたわら、元浦河教会の主要メンバーとして清貧を貫き、教会に献金し続けたため、子弟の教育費にも不自由な生活であったと伝わります。澤茂吉が病に倒れた際も懸命に治療にあたり、東京の病院へ紹介しましたが、澤の恢復を果たせず、傷心のうちに 翌・明治 43 年、診療所で自身も卒中に倒れ、帰らぬ人となりました。享年 54 歳でした。

竹内雄四郎の家族について

養父 竹内玄林(1826～1901)竹内家は代々藩医を勤め、玄林で 10 代目となる。藩校造士館に学び、長女小章の養子として雄四郎を迎えました。
明治 18 年山田に居をうつし、洗礼をうけています。明治 27 年京都に転出。
雄四郎一家と暮らすも、明治 29 年雄四郎は浦河へ赴任。娘小章も 2 年後浦河に転居して、二度と相まみえることはありませんでした。明治 34 年京都にて没。臨終の言は「二羽の文鳥を餓えしむることなかれ」でした。

妻 竹内小章(1862～1956) 竹内玄林長女 当章6. 赤心社を支えた女性たちに 詳しいので割愛

義妹 竹内行衛 早世

〃 田口竹子 同志社女学校卒業後大阪田口健吉(参天製薬創業家)に嫁ぐ。
1911 年の同志社女子大学設立準備委員に竹子の名があります。

〃 **竹内梅子** 同志社女学校卒業後、東京明治女学校に進学。同校の教師に奉職 のち函館聖和女学院・京都平安女学院にて教鞭を振るいました。

長男 玄雄(1889～1966) 祖父玄林・姉八千代とともに京都で暮らす。戦後シンガポールより引き揚げ1947年入植。

長女 大塚八千代(1887～1954) 祖父玄林・弟玄雄とともに京都で暮らす。

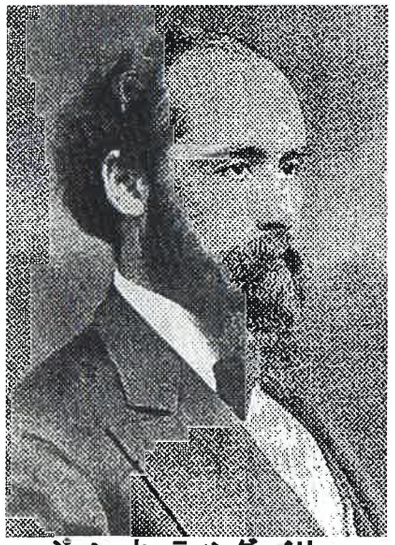
次男 章雄(1893～1942)京都に生まれた 明治 31 年荻伏の雄四郎の元へ移住。
昭和 17 年ボルネオ派遣輸送船撃沈され死亡。

三男 鼎(1895～1991) 明治 28 年京都で生まれ、明治 31 年荻伏の雄四郎の元へ移住。明治 42 年荻伏高等小学校卒業。札幌師範学校に進学。大正 4 年札幌師範卒業後、荻伏高等小学校に赴任しました。大正 8 年 澤吉夫が校長となり、そのもとで愛荻舎教育にかかわりました。(愛荻教育については、当章 3. 赤心社と教育 を参照)
昭和 17 年北方文化賞受賞。昭和 22 年公選初代の荻伏村村長に当選。昭和 53 年三田市を親善訪問しました。昭和 57 年勲 5 等瑞宝章を授与されました。昭和 60 年浦河町名誉町民。 平成 3 年 96 歳で死去。3 男 5 女に恵まれました。荻伏村に残された「澤吉夫顕彰碑」碑文や、赤心社「開拓記念木の弁」という碑文も鼎の作です。

四男 卓(1899～1950)

五男 央(1901～1980) 司法省に奉職し、少年審判所等更正保護事業の要職を歴任しました。勲三等瑞宝章を受けています。

雄四郎の師:ジョン・カッティング・ベリーについて


ジョン・カッティング・ベリー

ベリーは、会衆派宣教団アメリカンボードの宣教医師として明治 5 年(1872)神戸に上陸。神戸施療所を設けて、診療を始めました。盛んに郊外にも足を延ばし、当時欧化に積極的だった九鬼家三田城下でも施療院を設けるとともに、西洋医学を学ぶ熱意にあふれた三田藩の医師たちに最新の教育をもたらしました。

当時三田藩医であった、竹内・深見・若林らは、ベリーの医術に傾倒し、湯山町に独立慈善病院を設立しました。さらにベリーの活動のバックボーンをなすキリスト教にも理解を示し、三人ともこの後洗礼を受けることになりました。

さらに この明治 8 年には会衆派キリスト教会として近畿では 3 番目の教会となる摂津第三基督公会が三田に設立され、初代信者として澤茂吉・若林元昌らがギューリック師より洗礼を受けています。

竹内家の人々は 雄四郎の妻小章が明治 12 年(1879)、雄四郎自身は明治 14 年(1881)、さらに、義妹の 梅子と竹子は明治 17 年(1884)、義父玄林は明治 18 年(1885)に受洗しています。

明治 11 年ベリーが岡山県病院の設立と指導のために岡山に移ると、三田から若林元昌の子元益が岡山に同道して修行を続けました。明治 16 年 若林元益はベリーの助手後任として同郷の竹内雄四郎を推薦し、雄四郎は岡山に赴任することになりました。

明治 17 年ベリーは京都に呼ばれ、同志社病院設立にたずさわり、明治 20 年(1887 年)同志社病院院長となりました。明治 26 年同志社と、アメリカンボードの方針対立から、ベリーは同志社病院院長の職を辞し、帰国してしまいました。明治 29 年同志社病院は廃止となっています。

所感

竹内雄四郎は赤心社の社員ではなく、開拓民でもありません。赤心社の入植以後 16 年、開拓も軌道に乗りつつあったとはいえ、北海道での医療環境・生活環境は京都での先進医療を担う医師としての安定したそれとは比べ得るものではなかったと思われますが、これらをなげうって、澤茂吉副社長の懇願に応じて無医村状態となった荻伏村に飛び込んで行こうという彼の決意はどこからきたのでしょうか？　やはりキリスト者として助けを求める人を見捨てられなかったのでしょうか？それにしても、無医村医療に取り組むのはきれいごとでは出来ません。今般有意の医師の士気をくじき、村を去らせる最大原因は、他所者を便利に利用し、実は信頼していない心の狭い住民の意識であるということがよく見られます。ところが、なんと雄四郎は 2 年の約束で赴任しながら、2 年を過ぎても村を去ることはなく、家族まで呼び寄せて、残りの人生を赤心社拠点の地域医療に献身することになりました。これは、赤心社の人々の寄せた尊敬と好意が本物であったのだと推察します。

医師の本懐は報酬や家族の教育環境ではなく、住民からの感謝と信頼であると思います。

ピューリタン精神に裏付けされた新しい村にはそれがあり、雄四郎が村に尽くしたいと心から思える幸せがあったのだろうと思います。

竹内鼎の住居跡　浦河町東栄　現在無人

雄四郎の三男鼎氏は、澤副社長の子息で愛荻教育を創設した澤吉夫荻伏小校長とともに、教員として、また後任校長として、愛荻教育を継承発展させました。愛荻教育で育てられた有為の人材は、一時北海道教育界を席捲したといわれます。

終戦後、澤吉夫氏は赤心社代表取締役に、鼎氏は荻伏村長となり、困難な時代を相助け合って乗り越えたことから、竹内家と澤家が手を携えて赤心社と荻伏住民へ貢献しようと奮闘した姿が伝わってきます。 以後幾星霜、彼らの功績が住民の記憶から薄れていく現実に一抹の寂しさを感じるものの、今回赤心社の道程をたどる旅で、竹内雄四郎と同じようなモチベーションを持った人物に出会いました。

元浦河教会を司牧している五味一牧師です。師は以前も元浦河教会の司牧をしていましたが定年引退して郷里長野で過ごされていました。ところが、牧師がいなくなった元浦河教会の窮状を聞き、再び家族とともに荻伏の地に戻られたと聞きました。生活の場を北の大地に移し、この地に骨をうずめる決意で淡々と生きる姿に、竹内雄四郎を髣髴とさせる品格のある生き方を見た旅でした。

6. 赤心社を支えた女性たち

山口武宏

北海道開拓会社「赤心社」は明治13年(1880)に神戸栄町に本社を置き設立されました。社長は旧三田藩士鈴木清です。

第一次開拓団は明治14年に北海道の函館経由で日高郡の西舎(にしちゃ)に入植しました。入植戸数は 28 戸 53 名で広島、香川、東京、群馬出身でした。鈴木清社長は 2 か月後現地視察し第二次入植地として西舎の西に位置する荻伏(おぎふし)を選定しました。

第2次開拓団は社長の鈴木清から人格と経験を見込んで懇請された澤茂吉が赤心社の第2部長(後に副社長)となり、現地責任者として茂吉(29歳)と母の犀子(49歳)妻天以(25歳)長男亮(3歳)とともに厳寒地荻伏に入植しました。入植戸数は42戸84名で多くは愛媛、広島、兵庫出身者でした。三田から澤茂吉に同行したのは和久山磐尾、向井鉦太郎、向井裕蔵兄弟等でした。

18歳で入植した向井裕蔵はのちに澤茂吉を支え心強い存在になります。

明治16年(1883)に澤茂吉が開拓団で働く全員に次の3つの使命を宣言しましたが、この内容がその後赤心社の発展に寄与する大きな基盤となりました。特に宗教を自由とし、かつ日曜日を安息日としたことは特筆されことです。

・未開の地を拓きて産を殖すこと
・宗教の自由を重んじること
・品性を修養し人物を陶冶し一旦緩急あらば北門の為に尽くすこと

その後の赤心社の動静については他の歴史文化ネットワークさんだメンバーの記述に委ねることとして私は赤心社の発展を支えた尊敬すべき女性に焦点を当てて記してみたいと思います。

この女性達に共通することは田中栄を除いて三田藩士の家庭に生まれ、しつけ厳しく育ち、加えて三田藩士が中心となって設立された神戸ホーム(後の神戸女学院)で学び、そしてクリスチャンであったことです。これらの豊かな教養が彼女たちの崇高な信念に繋がり、厳しい環境の入植地で夫や家族や多くの村民を支える力となったことは間違いないと思います。

まず、最初に49歳で息子の澤茂吉と入植した母・犀子について記します。

澤犀子(さいこ)

赤心社2代目副社長澤茂吉の母　三田藩医関岡元淳長女
関岡家100石　屋敷町深見家近く　星崎家(九鬼隆一生家)対面
天保 4 年(1833)－明治 35 年(1902)享年70歳
嘉永 5 年(1853)　三田藩士　澤甚左衛門と結婚
嘉永 6 年(1854)　長男茂吉誕生

慶応元年(1865)　夫・澤甚左衛門が41歳で病死

当時犀子はまだ32歳の若さでした。犀子は夫を亡くした後も健気に奮闘し良く家庭を守り、茂吉の成長を楽しみにしていました。茂吉が学齢期に達すると藩校造士館に学ばせ川本幸民・清次郎の英蘭塾に通わせた後は福澤諭吉が創設した慶應義塾に入学させましたが、廃藩後の士族の没落は澤家にも及んで家計が苦しくなったためにやむなく2年を過ぎた時点で退学帰郷させました。

明治8年(1875)三田の摂津第三基督公会(三田教会)設立の日に茂吉と共に宣教師ギューリック牧師から受洗しました。

茂吉が鈴木清に請われて赤心社に入り、北海道に行くことを母・犀子と妻・天以に相談したしたとき、母も妻も鈴木清の熱い思いに心を動かされた茂吉の決心が固いことを知って賛成したということですが、当時蝦夷と言われていた未開地の北海道へ出向くことについてどんなに不安があったことかと推察できます。

明治 15 年(1882)第2次開拓団として茂吉に付いて入植しました。　犀子49歳の時でした。

犀子は生活環境が大きく変わった厳しい中で村民の母親代わりとして全ての困難に耐え忍ぶように励まし続けました。

家庭にあっては茂吉の嫁・天以と力を合わせて生活を支え、常に村民の家庭を訪問し、児童を愛護し、病者をいたわり貧者を慈しみいささかの労費を惜しみませんでした。犀子は地域の共愛婦人会元浦婦人会を組織し慈善事業にも力を注ぎ村民からは慈母のごとく敬愛されました。墓碑は茂吉・天以とともに浦河瑞穂の共同墓地にあります。

次に、注目すべき女性は澤茂吉と一緒に入植した妻、天以です。

澤天以(てい)(貞改め)

三田藩士　片山源次郎次女

澤茂吉妻　安政 6 年(1859)－昭和 17 年(1942)享年83歳

墓碑は浦河瑞穂の共同墓地にある。

明治 12 年(1879)神戸女学院入学　20歳で澤茂吉と結婚

11人の子宝に恵まれる(7男4女)

明治 42 年(1909)夫茂吉57歳で死去　天以51歳のとき

明治 15 年(1882)に第2次開拓団として入植。当時天以は25歳　夫茂吉は29歳でした。

明治 19 年(1886)浦河公会にて田中牧師によって受洗しました。

ギューリック牧師から贈られたオルガンで賛美歌を演奏して開拓地の人々に安らぎを与えたと言われています。

貧困の中で母として妻としてまた敬虔なクリスチャンとして生きた一生でした。元浦教会・元浦婦人会の幹部として地域のために50数年奉仕しました。読書を怠らず豊かな教養と柔和な性格をもつ物静かな女性で、理想的な女性像として多くの人々から尊敬され憧れを集めていました。

夫と愛児2人に先立たれたあとは当時荻伏小学校校長になって愛荻舎(あいてきしゃ)教育に情熱をもって進めていた3男吉夫と同居し夫亡き後も赤心社のために尽力しました。

次に活躍した女性は明治 29 年(1896)に医者として単身で入植した元三田藩医の家系である竹内(たけのうち)雄四郎の妻である小章(こゆき)を紹介します。元々荻伏村が無医村になることを危惧した澤茂吉が、同郷の雄四郎に医師の紹介を依頼していたもので、雄四郎は八方手を尽くし探したが見つからず、自ら2年の期限で渡道しましたが後任の医者が見つからず、雄四郎は荻伏村に骨をうずめる覚悟をしました。これに伴い2年後に夫の後を追い入植しました。当時36歳でした。

京都に住んでいた小章は7歳の次男章雄と3歳の三男・鼎(かなえ)とともに入植しました。三男・鼎は後に大きく成長して教育者として地域に多大な貢献を行い、荻伏村の最後の村長としても村民から大きな敬愛を受けました。

竹内小章(こゆき)

三田藩医竹内玄林と楽の長女　三田生まれ

篠山藩箕浦家3男雄四郎を養子に迎える。　明治19年結婚

文久 2 年(1862)－昭和 31 年(1956)享年94歳

夫の勤務の関係で岡山・京都と転居

墓地は夫・雄四郎とともに浦河瑞穂の共同墓地及び三田心月院に分骨されています。

16歳で神戸女学院入学、1期生　神戸のギューリック邸から通学　明治12年(1879)に三田の摂津第三基督公会(三田教会)で受洗しました。

神戸女学院では澤天以の3年後輩にあたります。

明治29年(1896)に澤茂吉に請われて医者として雄四郎が入植しました。2年後代わりの医者が決まらず長期滞在を覚悟して家族を呼び寄せました。

明治31年(1898)小章は3歳の鼎と荻伏へ入植し夫のもとに身を寄せました。　5男1女　母として妻としてよく家庭と夫を支えました。

明治43年(1910)　夫・雄四郎が52歳で急死、小章48歳の時でした。

小章に家族を養う重い責任がのしかかりましたが弱音を吐かず逆境を克服して子供たちを育てました。夫が亡くなってからは3男・鼎(かなえ)の家族と生活し、元浦婦人会会長を務め、地域に貢献しました。

医師の家庭に育ったため漢方医学に詳しく薬草を採集し村民の健康を守るために尽力しました。また典型的なクリスチャンとして人格、生活ともに村人の模範となる人で「実に慈悲深い人だった」と村民の忘れられない記憶として残っています。3男である息子・鼎が後に成長し教育者としてまた荻伏村長として人間的に大成するのを見届けて昭和31年94歳の長い人生を終えました。

竹内雄四郎の三男竹内鼎は澤茂吉の三男吉夫、向井裕蔵の次男塩出宇吉とともにその後の赤心社を支え、かつ地域浦河のまちを治めて献身的に産業・教育・文化の発展に尽力しました。

竹内鼎・澤吉夫・塩出宇吉の墓碑は浦河瑞穂の共同墓地にあります。

このほかに活躍した女性としては浦河公会**初代牧師田中助の妻**、栄があげられます。栄が神戸ホームで学んだ時の恩師が澤茂吉であり、天以は同窓生でした。

そして第2次開拓団として澤茂吉と一緒に入植した**和久山磐尾の長女キソ**(幼児教育の先駆者)も一時荻伏で暮らしていました。磐尾は明治 29 年(1895)老齢と病気のため赤心社を辞し神戸に帰り、娘キソと暮らしていましたが、磐尾亡き後キソは神戸の妹宅に身を寄せました。そして妹亡き後、晩年のキソは昭和 16 年(1931)北海道荻伏の弟宅に身を寄せ昭和 18 年に亡くなりました。

第４章　赤心社存続の要因を探る

１．鈴木清、澤茂吉の経営感覚

（１）　鈴木清の観察力の鋭さ、才覚

鈴木清が初めて北海道浦河の地に足を入れた明治明治 14 年（1881）７月 31 日浦河港に着港してから、港を望見した感想を「北行日記」に見ることが出来るが、その内容は、水（飲水)、空気、草木等から言語、食物、旅籠代にいたるまでの見聞と観察を記した後、浦河港について「…土地の広狭を概算するに、大なりとは云い難し。北には蒼蒼たる山野ありて山脈西南に連亘し、南は太平洋に向ひて望むべく、東西は両端倶に湾なりと雖も、東は以て船を入るに足らず。港湾は壱里余方面に昆中に岩礁二箇あり。」、「…然れども、室蘭港を離れて厚岸に至る迄百余里間に此港の右に出るものなしと。」「…海陸の産も多少あるに拘らず、…其両端に室蘭、厚岸の二港を有するのみなるは実に惜しむべき事にこそ。」「…併し此浦河の築港は地の利に於けるも、人民の冀望に於けるも、両ながら相応ずる事なれば……」と浦河港の築港を切望している。この時期の鈴木は第一次開拓団の開墾進捗が思わしくなく、状況把握と善後策協議のために渡道したのであるが、その目は浦河の港に着いたときに浦河全般に向けた観察と分析、将来性に向かっていたように思われる。物事を大局的に観察し、判断する目を持ち赤心社の経営にあたっていた鈴木清の才覚が、今日まで存続してきた出発点だったのではないかと思う。

（２）　柔軟な経営

明治 17 年（1884)、この年の日本経済は未曾有の大恐慌に巻き込まれた。要因は秩禄処分の公債発行や西南戦争の戦費を賄うために不換紙幣の乱発等からインフレが進み、貨幣価値が暴落したことによる。

この時、政府が不換紙幣の整理に乗り出した結果、逆にデフレを惹起し農作物や地価が大暴落した。赤心社も大きな影響を蒙り、株式数に応じて開墾した土地を株主に配分するとした経営の根幹である「土地配分」会社の使命を捨て、「守成法」経営、「混同農業」へ変更を迫られた。

明治 13 年に株主募集を始めてから 3 年後に早くも経営の根幹を変更する「柔軟性」を鈴木清、澤茂吉は持ち合わせていたのであろう。ともすれば、発足後に直ぐ経営方針を変更することは躊躇されるが、勇気をもって推し進めたのではないだろうか。既定方針、理想に縛られて消えていった開拓会社も多かったなかで、この決断がターニングポイントになったと考えられる。

（3） 零細株主への配慮

赤心社は株式募集にその特徴がある。その同盟規則（現在の定款に相当する）に於いて、一株60円であるが毎月50銭を積立て、満期10年で株主になれる零細株主に配慮した制度を設立時から取り入れている。これは全く他の開拓会社、結社に見られない制度であり、耕工夫であっても将来株主になれる目標を持ち、働く意欲、モチベーションの向上に繋がったと思われる。

（4） 複式簿記の導入

我が国に複式簿記を始めて紹介したのは福沢諭吉の「帳合之法」であると言われており、福沢から直接学んだ澤茂吉がこれを現地で実践したことが大きな理由だと考えられる。明治15年度の決算表には借方、貸方の表記がなされており、未だ「大福帳」の域を出ていないこの時代の会計記録においては画期的な事である。これにより赤心社は資産、負債の管理がなされ、経営状況の把握が他の開拓会社、結社より進んだ経営がなされていたのは間違いない。

（5） 株式会社としての役割が優先の経営

現在では「就業規則」に類する「耕工夫規則」、「懇成地割規則」、「特別地所割規則」等を設立当初に早々と整備して、現地で開拓に従事する耕工夫に対してかなり厳しい要求、制限を課している。株主に対する責任から、赤心社自体が優秀な労働力の確保に努めなければならないこともあり、会社と労働者（耕工夫）は一種の契約（現在の雇用契約）により成立していた。したがって、怠惰な耕工夫に対しては解放（契約解除）も行っている事実が見られる。ともすれば、心情、妥協に流れやすい開拓集団の中に於いて、赤心社のこの制度は特筆されるものである。

2．キリスト教精神の涵養

（1） 日曜日集会（休息日）

現地に赴く開拓民に対しては「耕工夫規則」（現在の就業規則に相当）を定め、「教育を怠る可からざるは言を俟たず。依て日曜日に於て業を休み、演説、講演等を開く時は必ず集合すべし」（移民の地所割渡規則）とし、毎日曜日に集会所に集合し、講演会等を開催し開拓民の団結を図った。これはキリスト教の日曜日は休息日とし、教会で講話と礼拝を行うことから倣っているが、赤心社は道徳とキリスト教の教えを説いた。また澤茂吉の恩師・福沢諭吉の教えを説き、開拓上の悩み等を分かち合ってきた。

赤心社は社是として“宗教の自由”を掲げていたが、鈴木清、澤茂吉等の指導者層はプロテスタント系のキリスト教信徒であり、その会社経営はアメリカ型合理主義、資本主義経営に位置していた。その中で会社経営とキリスト教の融和に対する赤心

社指導者層の苦心が偲ばれる。（キリスト教信徒は赤心社社員の約25%であった）

（2） 指導者自ら清貧な暮らし

耕工夫に対して厳しい要求、制限を課していたが、そのような中で赤心社が離散せずに今日あるのは、現地で開拓民と寝食を共にしながら指導してきた澤茂吉の精神にあるのではないだろうか。その精神が後々赤心社の指導者に引き継がれ、今日に続いているのではないかと思う。次に各書物で語られている澤茂吉の人物像について紹介したい。

【語り継がれている澤茂吉の人物像】

・温厚篤実、誠心誠意、堅実一方、勤倹力行を地でいった平凡な偉人

「ピューリタン開拓・赤心社の100年」　本多貢著　赤心（株）

・表面を飾ることなく、尊大な言動は微塵もせず、事にあったては真面目に対処するなど、一言でいえば堅実型の人間

「風雪と栄光の120年」　山下弦橘著　赤心（株）

・円満、謙遜、几帳面で清貧を生涯貫き、荻伏村建設の精神的な支柱

「近代化と宗教」　川崎喜久子著　中央公論事業出版

・ゆるぎない信念、悩みに耳を傾け、哀歓を共にする人間的な優しさ……指導者の清貧は、村全体の生活規範となり、人間としての修養を怠らず……荻伏村建設の精神的支柱　「北国に光を掲げた人々」　北海道科学文化協会　編

・物質的報酬を求めず、赤貧に甘んじ、会社経営に専心

「北海道開拓者精神とキリスト教」白井暢明著（北海道大学出版会）

（3）「徳育会」と徳育教育

社員団結の試みに「日曜日集会」を義務付け、そこでキリスト教の講話、討論等については既述のとおりであるが、その中でも道徳について論じていることに指導者たちの思い入れがあると思われる。

明治18年1月に赤心社社員たちの福祉を図る目的で「永明会」（社員相互の共済会の役割）が設立されたが、同じ年の3月に札幌県庁から赤心社の業績を表彰され860円の報奨金が支給された。この半額を入植者各戸に分配したが、そのうち有志20名（うち17名がキリスト教徒）が発起人となり、分配した金を拠出して「徳育会」を設立し、この基金を元に得られる益金を以て入植者達の「徳育」教育にあてようと立ち上がった。これが社員たちの団結力、結束力を固めたことは相違ない。

（4）「理想郷」新聞の発行

昭和9年4月から元浦河教会が伝道新聞「理想郷」を発行しているが、この紙面はキリスト教の伝道というより荻伏村の広報誌的な側面を持っていた。村内の主な行

事から事故、事件等地域コミュニティ新聞の様相を呈していた。

編集同人は教会の牧師の他、赤心社幹部（向井祐蔵、澤吉夫等）や荻伏尋常高等小学校の教員（竹内鼎校長等）であった。このことからも、赤心社、教会、荻伏村が一体となり地域を構成していたことが伺える。

（「理想郷」新聞については第３章　２．赤心社とキリスト教　参照）

３．教育への情熱

（１）子弟の教育

明治 15 年荻伏に入植して先ず手掛けたことは、入植者達の掘立小屋の住居であったが同時に草葺小屋の集会所を建設した。集会所は既述のとおり「日曜日集会」の為の場所であったが日曜日以外は子弟の教育の場として利用された。

明治 17 年正式な学校として浦河に尋常高等小学校があったが、荻伏から通学するには「けもの道」を通らなくてはならず、通学は無理だとして「学校兼会堂」を建設しようとの声が上がり寄付を募って暮れに完成し、官庁の許可を受けて官許「赤心学校」として開校した。

赤心社は開拓会社として開拓に取り組むことは当然として、先ず集会所、教育場所を建設したことは指導者層の「教育」に対する熱意が感じられる。(集会所は開拓民、耕工夫に対する教育場所）この教育の熱意は、指導者層の故郷「三田」から引き継いだ精神であったのでないか。(第３章　１．故郷・三田から引き継がれた精神　参照)

（２）「愛荻舎」教育

赤心学校は明治 24 年に浦河尋常高等小学校荻伏分教場に引き継がれ、その後荻伏尋常高等小学校へと展開していく。大正 14 年に澤茂吉の三男である澤吉夫校長が提唱した「作物を培って人間を作り、家畜を飼うことによって魂を養う」「愛荻舎」教育が有為な人材を育み、送り出したことが赤心社存続の大きな要因であろう。

（詳細は第３章　３．赤心社と教育　「愛荻舎教育」がもたらしたモノ　参照）

４．「荻伏」まちを興した赤心社

現在の浦河町荻伏（荻伏、野深、姉茶、後辺戸）の元浦川流域は、赤心社が入植した当時、海岸に数戸の民家、入植地へ連なる途中に開拓農家が３戸、入植地の奥にアイヌ人の住居が点在するだけで、あとは巨木が密生する原野であったという。ここに赤心社の面々が入植し、開拓のみならず学校、病院、郵便局等を整備し、道路を開削し、治水橋梁架設等に奔走して荻伏地域の「まち」を形成していった。

このことから赤心社の発展が荻伏村の発展につながり、現在に姿を留めている要因の一つと考えて間違いない。(荻伏の開基の日は赤心社が入植した明治 15 年 5 月 11 日となっている。)

【編集後記】

平成 29 年 2 月に私たち「歴史文化財ネットワークさんだ」の郷土史研修グループで「明治の初期に神戸元町に元三田藩士・鈴木清を中心に設立された北海道開拓会社『赤心社』について調査、勉強会を行おう」とのことから出発し、三田市立図書館等の書物を中心に勉強会を開催しました。その後、「北海道の現地を訪問し、先人達の息吹を感じながら開拓者精神に触れよう」との思いから、北海道浦河郡浦河町の町立郷土博物館に連絡を取ったところ、「浦河で赤心社の故郷・兵庫県の三田を知らない人はいないくらいです。来られる前に浦河町の町史等を送りますので是非読んでから来て下さい。そうすればより深く赤心社が理解できるのでは……。」と沢山の書籍を送って頂きました。

そして研修グループの有志 6 名で 9 月 20 日から 22 日まで、現地を訪問して先人達の足跡を辿り、その息吹に触れてきました。

私達は現地で見聞したこと、また調査したこと等を「冊子にまとめて地域の人達に対して赤心社の偉業を伝えたい」との思いから約 1 年間とりまとめ作業を行ってきました。その成果を今年度「三田ふるさと学習館企画展示」を行うとともに「ふるさと学習館講座」にて地域の皆様に伝えたいとの思いから当小冊子をとりまとめました。

平成 30 年 9 月

NPO 法人・歴史文化財ネットワークさんだ

「赤心社を訪れる旅」一行　代表　福富悦夫

「北の大地に理想郷を築いた人々」（非売品）

発行日	平成 30（2018）年 9 月 20 日
編　集	NPO 法人・歴史文化財ネットワークさんだ 「赤心社を訪れる旅」一行
発行者	NPO 法人・歴史文化財ネットワークさんだ 連絡事務所　三田ふるさと学習館気付 〒669-1532　三田市屋敷町 7-33 電話＆FAX　079-563-5587 E-mail　rekinet3da@kjd.biglobe.ne.jp
印刷所	DIY 出版ウエナカ

当冊子は「県制 150 周年記念県民連携事業」の助成を受け作成しました。